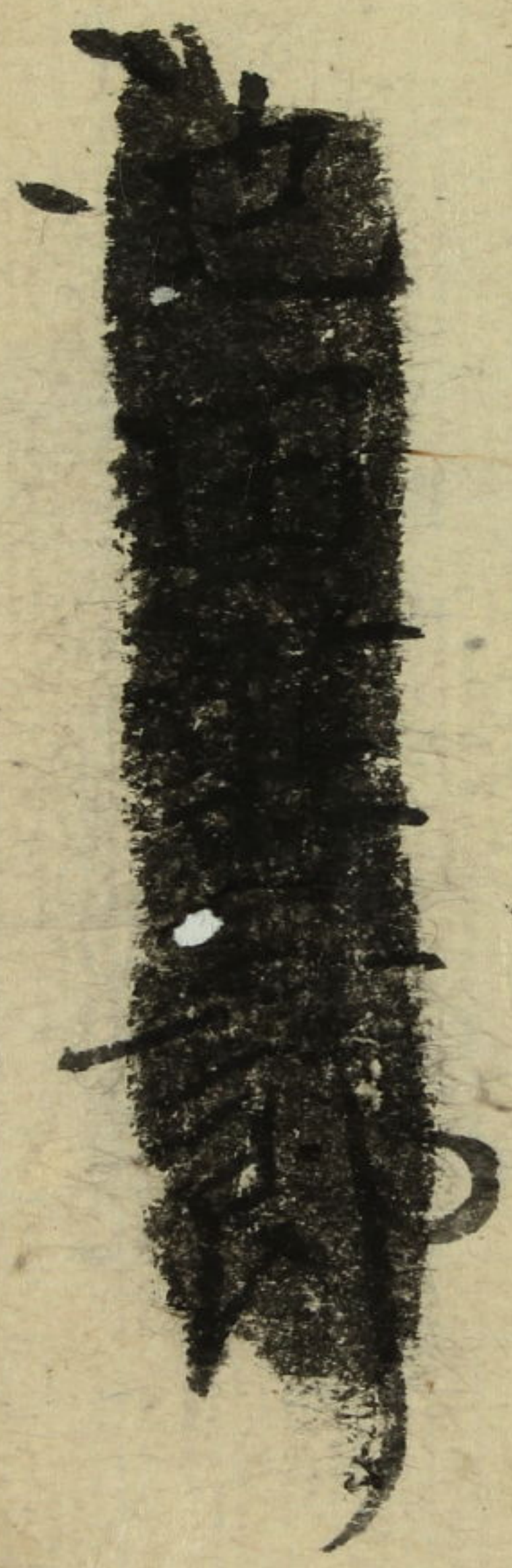


明治二十一年  
寅一月之末



秋	縮	早	浴
暑	妻 <small>十四</small>	縮	柿
毛	霧	芦	芒
此	秋		十二
秋	花	系	尾
の	火	瓜	七
百	五		
秋	秋	鬼	芋
丸	灯		七
十九			
西	残	庚	辛
瓜	暑	子	
十三	十六		

秋	稻	早	浴	瓢	萩	桐	栲	蓮	生	判	貸	七	七
暑	妻	稻	柿			一	待	飯	身	結	袖	夕	月
	十五					十						一	秋
七	霧	芦	芒	苞	萩	外	施	中	盆	糸	新	星	立
七	此			蕉	十	々	録	元		通	糸	合	秋
	萩		十二				兔			三			
秋	花	糸	尾	葉	葉	本	踊	焼	盆	迎	机	別	冬
の	火	瓜	む	の	九	権	籠	籠	北	火	洗	星	之
百	十五								月				部
十六													
秋	秋	鬼	芋	栗	風	桔	就	切	暮	魂	硯	下	秋
丸	灯	む	む	仙	む	揮	田	筆	赤	赤	洗	此	秋
十九							娘	古	五	五		川	
金	残	庫	西	縮	紫	角	送	柳	菟	芋	梶	梶	秋
	暑	幸	瓜	の	苑	力	火	狸	柳	市	紫	紫	秋
	十六	子	十三	む		七					四		



惜年	年芳	長兄	昔季	吹葦	亭月	偏八	當々	大河	雲霧	ぬくめ	冬日和	冬仙	冬花	垣火
大悔	春降	年市	年木	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車	雪車
除夜	古履	追遊	年忘	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走
冬	古履	追遊	年忘	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走	師走
雜	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行

古今千五百題發句集

黒瀬曾見校輯

秋之部

七月

又月れきや扇のきとありき 素檠  
 ふし月や出つひの子たおろろ 南枝  
 かりとえんくきぬあきと月くれ 尼  
 出わらや秋立おろ小あ人古 恒丸  
 奉れ花おや秋たつ枕を心 荷少  
 秋つや枯ささりくと下る 儀 茶静  
 雪れよあられきふて秋のたつ 一  
 星きらりく秋つらなる 眉山

立焔

豊山山秋のつまねきしるれ 仁賢  
 青くはぬく竹やまもれ枝 粽一  
 秋のつゝ増減のちり 溜りあ 路芥  
 故やうい立妹にたつちむき飛 抱儀  
 由手洗したつ妹涼しあ清し 柏溪  
 況おとやたうな妹のあこぬめ 小柯  
 九夏之伏の暑くろり 出づり かのれ  
 まさうあしんせおいたぬく 遊後の  
 まもや 風に燦くむら 景文  
 まつまると秋は立けり空の青 白扇  
 秋もつやあまるとなれはきりふとや 風子  
 立秋や品つけうへる 古着 年

今朝の秋

梅のつや切味とをい出羽庵丁 三槐  
 とる波のえんく秋立 街り形 氷孤  
 出さ流のかやくまふらると秋の妹 遅流  
 試の矢を一筋やまはの秋 大宮  
 豊をけく仁まの赤しと秋の秋 全  
 故屋うり此中呼やと秋の秋 佳年  
 歩拵の筆踏るやけきとのあき 秀外  
 とく起とあえくをれと秋の妹 未月  
 六月にるおとけやと秋の秋 李旦  
 初秋や峰をり雪のちきれり 小柯  
 まつ秋や古の龍の尾りし時 芦窓  
 とう秋や海小春田の一みとり 古翁

初秋

来秋

初秋や折れぬはさくわらふ冬のある  
 ちつ秋や子休のあつく星合せ ゆいめ  
 ちつ秋やこれ生くる来一是者 三槐  
 暑はをいん枝ぬ秋の来ゆく 太拳  
 来秋やきつじに踏とつ 蒼虬  
 針の目もきやくをうて来秋 吉杉長  
 七夕や穠の来ち乃かこれ里、 野坡  
 大ふさふさにあふもをり箕のきり 奇月貸  
 七夕や一る階とあふの 全  
 七夕や粉ゆひてをる 五玉  
 七夕や一ひあふ 秀々

七夕

七夕やむらうとあれて抽涼巻

千輅

閏七夕

七夕や 景文  
 七夕や伸へくけおれ 蓬雨  
 大あふさや何洗あふ 木公  
 星合やいつこのき 連志  
 星合や輝ふお 太拳  
 星のあふ 松什  
 星の恋及故 小松  
 星の叔や 伊大 仙兄

星合

手向

子らうし 小叢

小叢





硯洗  
草市

洗つてのりも休まぬ硯の形  
草市の市に賣るや造りむ

三萬  
相堂

刺籍

さし籍乃仏くさるる衣なり古  
又月十日歩むさ小人く借くあのみん  
あけをささるる一四糸六子交乃功徳  
と近しやるる也

古  
五朗  
筆庵

圓通會  
迎火

羽子のあはれもさるるや糸をさ  
おひ火やむらうくふくさるる  
近しや夕く掃除くハの巻  
近しや夕あを糸とむく人あ  
猿あけく志をる羽折や魂近ひ

小  
蓑  
羽人  
樂高  
素瓊  
棠切

魂近

魂祭

心くさるるに罰えきくさるる魂祭  
好く他人ハ交きけり魂まつり  
手此ものく経きや魂あ  
何きくさるる交くさるるたをくさ  
夕飯ゆきくさるる魂まつり

茶  
静

魂棚

魂棚のちへ入るや猿あ夜  
も多たれや名の灯借りお  
魂棚のちへ入るはまけるお灯が  
たま物く家居のちへ入るは  
物来さのちへ入るは生才魂

史  
千  
右  
介  
羽  
人  
天  
遊

盆

生身魂

おきやう門のちへ入るや盆盆色  
月や灯や人や盆盆色盆の肉

鬼  
孫  
未  
木  
邊  
流

盆の月

人出く多くて寐一盃けうち  
け焼き塔り斗あり盃利之  
るれきの味もよきい盃休  
夜入く油冥り盃の月

搜堂 鷄年 佳年 鳥義 楓下

墓 叅

うら香ゆ生く夜く盃の月  
月むゆらへんふく墓 素

南枝 鳳朗

棚 經

柳狂の泣やもろく露の香  
塔魚の焼こりけり蓮の飯

白雉

蓮 飯

中元をつゝえてりゆを森北  
燈籠と眼のつく町乃曲りふ

小義

中 元

燈籠と眼のつく町乃曲りふ

月貨

燈 籠

〜〜〜

全

〜〜〜

素秋

切 籠

出た〜〜〜燈籠き〜し板くれ  
燈籠を提〜〜〜燈籠此れ  
も〜〜〜交ゆり〜燈籠此  
羽提〜〜〜出さ入る〜燈籠此  
風れ〜〜〜板〜〜〜燈籠此  
浪〜〜〜の板〜〜〜燈籠此  
乃〜〜〜出〜〜〜燈籠此  
め〜〜〜の〜〜〜燈籠  
森〜〜〜の〜〜〜燈籠  
椽〜〜〜の〜〜〜燈籠  
浮〜〜〜の〜〜〜燈籠  
也〜〜〜の〜〜〜燈籠

氷谷 清く 羽人 全 縁雲 應門 竹古 女柳 松什 蘇村 糞二 干輪

送火

棋待

施餓鬼

龍田姫

踊

ともみ屋の後手一釣とまきり出れ ミカ 蓬宇  
 灯ともしき月道 ミカ 切龍川 濱吉  
 送り火やとつと燃て八階安き ミカ 秀外  
 おくり火や塔のともすく ミカ 月夜 葛三  
 拵持を祝く物もあそくれちあり カ 柏笑  
 突出せは子と泣かぬ カ 護物  
 人おとく人れとぬや竜田姫 ミカ 露泉  
 借上 ミカ ぬり踊のまより カ 竹益  
 ともり子や何 カ 知氣 カ 走り カ 竹窓  
 人 カ 過 カ 耕 カ 地 カ 踊 カ 踊 カ 踊 カ 踊  
 常解 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 龍入のあ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ

角力

白牡丹 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 上 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 祝 カ の カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 踊 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 人 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 子 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 負 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 ま カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 可 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 後 カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 も カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ  
 え カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ カ ぬ

千 輅  
 乙 彦  
 棠 功  
 其 流  
 秀 外  
 曙 祥  
 竹 与  
 達 美  
 心 阿  
 寄 泉  
 馬 珂  
 秀 々

桐一葉

菴れ戸へ拾ひ入り 桐半葉  
相をえ 翁くさつくと又一葉  
繩拂ひくくおれはきう一葉  
桐れ本や余れ本一葉二を  
ちりやんはとれはとれ相一を  
多ききもきこえぬおや相一を  
襟えくおやうと相の一葉ふ  
之葉えく拾ひんきんや菴の桐  
つひくおやれとあうへちり一を  
るんれと相へちり一葉ふ  
勢の足向いやぬ一葉ふ  
んくちり小思おちり一葉ふ

古 士朗  
一 芝  
山 骨  
九 阿  
萬 頃  
扇 紙  
曙 祥  
乙 彦  
高 公  
荷 少  
半 南  
双 鳥

一葉

雞頭

本戸口や替ひくく代名町  
勢ひや竿れ必持る菴の中  
波遠へ出るとあや勢ひお  
勢ひや留るまきり菴あり  
又くさすれもこれけを勢ひお  
漆もの匂ひのきり勢ひお  
葦 窓  
味 舎  
乙 二  
梅 室  
月 貨  
粗 文  
楽 高

葦

眉 山  
里 夕  
李 旦  
餘 力  
芦 窓  
味 舎  
乙 二  
梅 室  
月 貨  
粗 文  
楽 高

あつたふりさるるやうな竹の小窓へ  
 お舟も拭かけたらさういふ  
 外もや人のあふれをさるる妻  
 美さむ心持と受けぬ外も嘆く能  
 外もや答おす紫もさくもくも  
 外もややく起れいとやさる  
 藤やよ水手掛ひのやうに  
 外もや垣乃遠くさゆれむ  
 あまのぼろ仕りお水もつるさ  
 外もやあまのほろけむる  
 外もや夏ゆきの水ぬ外も  
 岸の咲ぬおれく咲くけり

南枝  
 了つ石  
 小柯  
 抱儀  
 得取  
 青州  
 路芥  
 萬頃  
 斗南  
 連志

木  
 槿

外もや此れ馳走とあつて神まの  
 さむ心もつあまのわ外もけ  
 外もや持越一藤もさる外も  
 外もや後ひあつて曼もつる  
 外もや日をけりしむくも  
 外もや夢もあひし備へ  
 外もやえり百小指も下この  
 枯るもさる外もの咲くけり  
 外もや始終もさる外も  
 床島乃登りさるも木槿也

生懶

外もや手拵借るも木槿越

四明  
 退歩  
 三潮  
 大宮  
 佛兄  
 凡阿  
 餘力  
 由誓  
 相堂  
 小柯  
 景文

桔 槿

女郎花

村里や本槿垣く小大槿ひ  
 郊迄こ本槿咲たり槿るけ  
 折るもく衣のそえたる本槿は  
 遠こ乃本や本槿の垣の木く  
 きこー除るるの乾く本槿が  
 いつ槿こまけ桔槿やそ富  
 手さるるに秋風たち女女郎花古  
 又是れあや山崎のそまけ  
 本北さるふいつそまけあうめ  
 あ〜あまのれわそまけあ  
 せ〜むね入る色のけつくし  
 せ〜あ〜あまのれわそまけあ

樂高 旦松 梅室 曾見 荷少 山馬 大江九 月貨 南枝 史本 樓堂

萩

おのら萩〜あなすうらまめむ  
 ふ〜たのえ〜えんたりあ〜む  
 え〜おけい〜あ〜あ〜あ〜あ  
 萩〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
 川〜〜や満の木戸の萩のちる  
 立〜〜る葉〜〜の減や萩のふ  
 陽立登る〜む〜や萩のふハ  
 萩の株把わ〜く〜や池のちり  
 埴谷れ原〜〜〜萩の上下をわら  
 野中〜〜〜む〜〜のそまけ

右介 けいめ 三槐 山骨 茲竟 粗文 路芥 小蓑

小川〜〜〜

玉環〜〜〜たき〜〜〜萩の枝 全

古今急とや小題と

~~~~~

枝のやわらけたき萩の秋の  
 きれさくハ似た風の吹小森の  
 くら杭萩をむらう中世の危  
 隣う流るるやさき花を  
 智乃引出し萩の下枝の形  
 古  
 白萩や地よつとまじくも  
 大空や萩つつけおく竹筭  
 一ツの存分ありくさき花  
 萩咲やるこ小庭へあふ  
 一株ハあを法一萩乃む  
 牛歩  
 月窓  
 巴雲  
 百畝  
 紫峰  
 閑更  
 抱儀  
 冬岐  
 萬頃  
 全

萩

蘭  
 鳳仙花  
 紫苑  
 瓢

萩起さやうくさや城を  
 萩さくやるの仕場を  
 風北なるけるぬりさき  
 肉ふく取けハあう萩の  
 釣あけく魚あう萩の  
 ぬくハ萩のあやう萩の  
 まく為きおかしうさ萩の  
 葉の香やまじし法を持  
 萩と三人く居るや風仙  
 咲あられあるや紫苑の  
 けあけくさうのさゆら  
 障のと萩の影の遠ひ  
 徐寧館  
 應門  
 露玉  
 鳳朗  
 正价  
 乙亥  
 由誓  
 曲阜  
 浄香  
 筆序  
 青州  
 均無

芭蕉  
 ぬけらるるも昔一 熟の地くく九  
 ちと斗了柳つる 家のゆく魚丸  
 移ゆく魚をくつハ 吾らふ暇を  
 とくされふきねく 沈つて 熟く水  
 味くやうく 幸茶をくく 芭蕉也 古  
 蓮の葉のふハ 毛くく 山きれハ 古  
 くれ換へたうれて ききと や栗 畑  
 河造り川ゆきうく 移のむ  
 世れ中の平えくく 移の不  
 白れまきく 徒吹くく や柳のむ  
 空く海さうく けきく 柳の不

松一  
 南枝  
 氷狐  
 善義  
 凡兆  
 梅室  
 嵐雪  
 萬頃  
 旦松  
 全  
 てきり  
 露泉

洪柳  
 つくよに 赤き 柳の 枝の 洪  
 心くく 目ききく いろ 芭蕉 古  
 風おのき 結く 芭蕉 くれあて  
 芭蕉 くれたう ねく 赤く くれ  
 風さくく とも月あり 芭蕉  
 秋の 雨降とく くる 芭蕉  
 沈く きの けきく 休む 芭蕉  
 る けきく くれく 伸る 芭蕉

中秋の月  
 秋さくく やそれ ぬを 障子 城  
 障おきハ 出つて くれ 芭蕉  
 赤く くれ月ききく 芭蕉

月貨  
 野坡  
 良雅  
 翠流女  
 女柳  
 か了  
 風朗  
 青州  
 昌文  
 曙葎  
 百前



宇垣ハ小きく受りのそらゆ  
 抗歩ハあのかろくくもまこくま  
 船の竹をわたりや板のまき  
 穂の出まきく一面もまき  
 荷くまきれわとまきれまき  
 細歩の出まきをわくやむそ  
 角又まきやいそのかぬのむそ  
 さく出たるむと尾まのまき  
 風まきくいとくかき尾ま  
 尾まきまき尾まかまの流ま  
 草まきやまきまきまき  
 むくまきまき入やまきまき  
 氷狐  
 蓼可  
 立栝  
 露泉  
 嵐衛  
 一應  
 其角  
 松軒  
 松一  
 山谷  
 得蔓

草まきまきまき  
 氷隙ハまきく垣板やまきまき  
 くまきまきまきまき  
 名のかきまきまき  
 茶小紋をまきまき  
 船の竹をわたりやまき  
 六きまきまきまき  
 おもたまきまきまき  
 まきまきまきまき  
 息つまきまきまき  
 えやまきの月まきまき  
 芦窓  
 味舎  
 善項  
 史下  
 佳年  
 魚加里  
 菊人  
 蓬字  
 晨支  
 木公  
 應門  
 伴志  
 早稻

西瓜

早稻

芦花

舟のつく癖のえんりう芦花を  
龜のくくはのあひや芦花を  
片くも町くありく芦花を

琴雅  
南枝  
卓池

糸瓜

茵擔桶一燒巾おひや糸瓜柳  
かあより陣へししをちり垣  
りつみや実乃らね州の及ふし

琴雅  
蓬字  
荷少  
全吏

鬼灯

鬼灯の売くふくさむ舟り如  
是さへ小舟りあり様を夜く

山骨  
成美

唐辛子

株をくく名おひりり夜く  
夜くく鶴の尾をく畑り如  
垣へおれまきく込く唐辛子

青帰  
松分  
萬頃

稲妻

たけきれく笑ふ女子や夜く  
色つくくえくくく久く夜く  
あま中ふ大工及く夜く  
んて若くはいとねは果す夜く  
夜くくく夜病をけく夜く  
さつけの定規借く夜く  
毎吹くくくいふつみや風上り  
いふつみやのあやあやいふつみや  
いふつみややをれくおむ比の中  
いふつみややちくくく帆を船  
いふつみやや粟素多くとんえ色ね  
いふつみややれくくく夜く

南枝  
濱吉  
雨蝶  
露泉  
應門  
馬加  
路芥  
小菘  
巨月女  
乐高  
ゆめ

霧

いふつふれはなや隣子を梅とえぬ  
 いふつふやあふふゆあ推しな  
 いふつふや意の城下の人の中  
 いふつふにゆさうらゆせりうれ  
 いふつふはわのうにささるる  
 いふつふやよふふや月夜  
 いふつふや知り下れ波のおゆ  
 いふつふやあふふはなをぬけ  
 舟と峰あふのうやまふれ中  
 霧のうらやまのうらやまのうら  
 霧のうらやまのうらやまのうら  
 霧のうらやまのうらやまのうら

水志  
 禾木  
 万頃  
 てきろ  
 小柯  
 乐高  
 千輅  
 姫山  
 星少女  
 標嶺  
 一清  
 心阿

花火

小あまをしむ火の音のあまの音  
 田中へ花火のやくら独けあ  
 屋の田や波の浮るる火光  
 花火名や誘ひ合ふふらうる音  
 迹足とく火を移りむやれ  
 園をしむ火の落る氷の音  
 眼をうらむ火や人も来て吐き  
 津出のやむ火のあふる仕立  
 海越へるゆる山のむ火うら  
 初月やむらふの山の火うら  
 子を折るあふるる踏ぬ初月  
 あうけぬのやうふらうる秋の風

其角  
 皎雪  
 李旦  
 小柯  
 争見  
 古介  
 松竹  
 羽人  
 應門  
 乐高  
 蘿高  
 茶静

初月 秋風

初嵐

杖の木の吹や隣の新杏の樹  
秋の木の裾より来るや藤籠山  
社の子の草をよみ入れぬ入に地  
秋の木のさきと吹こむや燈籠白ひ  
湯潤く鏡を飛びや秋のうせ  
おれ色も申刺る通りや秋のうせ  
秋風や船のとやひの伸ちるこ  
秋の木のや萩の中よりともこ  
昔蒙小浮葉とをりや梅の風  
株の木のやまの鶴も小昔やうち  
砂川の浪もきこるや初あらし  
輝けや登り子供の初あらし

青帰  
小蓑  
女柳  
てきこ  
小柯  
里春女  
青州  
秋香  
連志  
北松  
かつら  
史来

残暑

古池とよとひ迫る残暑うね  
ちろくと起くるの啼ふ残暑水  
佛おやのうらふ暑の残けり  
羽子の半も飛歩り残暑うね  
弦をきくは体統へる残暑水  
うら葉香度あまえる残暑水  
吹とをるや啼つたれ残暑うね  
あ仕場ふさし込秋のあつは地  
昔るるとをたぬふれをけきう  
取つてくれねあふああるやをけきう  
遊くうとくかう止まりそのきう  
焚たてると火小くあふやをのきう

禾葉  
松什  
米吳  
稻洲  
應門  
おひり  
息  
大之  
許六  
卓堂  
應門  
月貨

蚤 殊 暑

むし鳴や在雨洒屋の素小口  
や火に暉と迫きやせれ夢  
それ音のあへるはねて氣北  
とくそれる句と音やうそれ夢  
吾先さ

樂高  
山骨  
粗文  
小柯

蛇 籠のむしとあふのて別けり  
虫 籠のむしとあふのて別けり  
を籠をつるやうきも籠の心  
きこくれ 音れをまつの心乃きこくれ  
灯と音とくそれ音ふちるあそび  
と音と帯の中やむしれ一息  
あおとふやうふきとつむしの音  
そ留や句のまははく小石響  
籠のむしとあふのて別けり  
虫 籠のむしとあふのて別けり  
を籠をつるやうきも籠の心  
きこくれ 音れをまつの心乃きこくれ

千輅  
曙篠  
樂翁  
波文  
馬桐  
巢月  
南枝

あへ出くそれきこりや結  
啼こける白あそびきこり  
楠乃石こもをこりきこくれ

茲竟  
芦窓  
鳥義

八月在宇

きこくれ 音れをまつの心乃きこくれ  
一息こるハ森ねしとらむくす  
遠みけハふつにちるや音  
きこくれ 音れをまつの心乃きこくれ  
松窓と遠むしけりきこくれ  
只むしつと音やきこわれきこくれ  
こころをこくれとつハ毛  
足音ふとまくれと音や響むし

惟草  
百畝  
成雨  
曲阜  
素瑤  
秀外  
風子  
万久

響 虫

松虫  
いと、  
糸立虫  
冬虫

松むしの春や由曹子此立とも  
縄やつて埃のたつて啼ひと  
森とむれくけきふり糸立虫  
とく小をらるる小つら子此宿  
等々うねやあちち飛去

桐月  
全  
斗南  
太節  
萬頃

ある歌の糸立虫とく

蜻蛉

飛つてくいと此の心を温沌う  
非株とわりかくされいふとふ  
とんやうやきく入を逃くゆく  
屋まらるるるれまを蜻蛉水  
とんやうや名西此出あ詠書清

月貨  
得所  
松軒  
小蓑  
五玉  
春水

鯛

張指れをから並ふとんやう  
夕暮れ秋を渡るいんやふ  
季四十九とく一れを耳とく  
わくわくや春一とく流川斗  
ひくくやあ居内ま井の餘  
志まつくハ情志まつくハ秋の鯉  
自かる本や情くある秋の鯉  
漸くよみは是迄や情の鯉  
蝶落く重る秋乃あをれふ  
雨のあまきまら秋の鯉  
去く居る牡丹とあまら秋の鯉

斗南  
春晷  
山月  
白雄  
芦窓  
得益  
一芝  
万頃  
逢流  
棠切  
芦窓  
風子

秋蝶  
秋蟬

秋乃餘 謝堂

下張の世出と泉もつふはあらしき

確むらさきつゝふおのりも字ふへく

九十九可れも勇ましく矢指れら

とまむらさき

おちゆきとく浪もよゆる秋の餘 小篁

傘は法ゆく衣もあまの地 荷少

森あてくも水ゆハ眠一秋の雨 笑山

楳垣の中は住居や秋のあめ 芦窓

秋の雨年ふす庭は木立くぬ 抱琴女

挽詞へ人のたぐりぬ 小柯

秋の雨 琴雅

秋 秋 雨 蠅

秋 日

秋 日和

扇 置

葉 月

八 朔

竹の春

秋生

秋の日は徒然ちりりや斧の音 小篁

乃乎小袴く秋の日和 一芝

もろくとも出くけりや秋日和 楓下

いつとまう失ふ妹のあまきぬ 小菘

雲ふちるやも言き葉月也 八笑

ハ節やわり此出またる獅子以 卓池

ハ節やまあめのわゆる新々和 南枝

ハ節や四向くする夜乃まら 樂高

ハ節やくつきるさゆら山の緒 萬頃

風を窓の晴くちりり竹の葉 琴雅

穀へまゝ流せよをこく作の毒  
 三日月 うつろと流しむくやこり月  
 木戸メふ出く採らるるこり月  
 月ぬむ手此合されぬ小舟の如  
 月れ望へ出くかこりる角力也  
 てる月を脊中へく上る罌もれ  
 月とくく人を採出をり記りの如  
 少作く流るる月ぬぬの如  
 言浪やまこりる月と持ちゆる  
 時ぬくやれ先を昇る月  
 月とぬぬの如流るや河原の如  
 川と流るる月ぬぬの如

草見 萬頃 一清 杜有 喜鳥 抱琴女 杜有 氷狐 山馬 全 稻洲 紫金

待 雷  
 汝のころ切くかりる月れぬ  
 月高くあるわくくくく 百姓家  
 待 雷 やまを此望へまこりる  
 待 雷 や拭くくく茶のくく  
 待 雷 つれく月待 雷 森く如  
 明月 や煙くまふゆめ  
 明月 や霧れりまちへ霧とま  
 明月 や海へくくく門の犬  
 明月 やまつ松山の尾をて出る  
 明月 やまふく小川の流るる  
 明月 や火を焚くくく笑るる  
 明月 や雲合ふ小いっくく

巴雲 楓下 小柯 逢流 鳳朗 山馬 雞年 其流 其松 蓼可 南枝



今日月

明月小色をばたのきえりし月  
 明月やまきくま夜なるおしきつ  
 明月ハやまきくま夜なるおしきつ  
 ままやふお出くまきこれなりたる月  
 たちあくとあきゆるしきとる月  
 まましりとあきしきとる月  
 しとる月あきとる月  
 赤合とく一筆しきとる月  
 月日一た月あきとる眼のせじ  
 聖も出る月とる聖はあき  
 かうゆつたお中ふす聖は清き光ハ  
 おをむしあきとる地しとる明の光

月貨  
 右介  
 露泉  
 禾木  
 千輅  
 眉山  
 秀卿  
 瓦人  
 一撰  
 欽哉

月今宵

伏待月  
雨月

聖も出る月とる聖はあき  
 門々くくく月や竹のわく  
 露をともすきつとる月あき  
 全  
 抱儀  
 遅流

晴りあきとる月とる  
 出らるるまきとる  
 聖も出る月とる聖はあき  
 門々くくく月や竹のわく  
 露をともすきつとる月あき  
 全  
 抱儀  
 遅流

入秋

良夜蝕 餅くらとけり月れきる  
得益 抱儀

一とまうきうちらりやる月 松什

仲の秋中のまはま中しつらなるの

むしそとと唐の特士のきるーたると

何とれくあ〜しきこ地のをいれて

曾れ〜と〜い〜とる月 大梅

仲秋餅

中〜おき〜られ〜とる月 抱儀

海士おあ〜と〜れ遠きと月れ前 氷狐

火揃ち〜と〜と〜とる月れ前 稲洲

月宿

入月 入月や竹の葉先〜とつ〜 草洲

月れ入る樹と袖をりしとぬれ 茶静

雲月 心為〜風れわ〜と月れ中 かつら

等果〜と〜と〜とる月 助宣

月暈 風をれち〜と〜と月れ前 草洲

去〜と〜に故〜冷きたる月れ前 水明

月見 秋涼〜と〜と〜とる月 芦月

ま〜と〜れ〜と〜と〜とる月 松什

聖のれ〜と〜と〜と〜とる月 永鷄

川越〜と〜と〜と〜とる月 欽哉

新法乃むし〜と〜と〜とる月 宇弘

船〜と〜と〜と〜とる月 心阿

十六宵

之人うとまより。あく月又ふ  
 くれ森をく二世よりかれ月又れ  
 十六宵やまは山ののきをききし  
 花陰やととまよとられ色  
 いさくしや海を越しちる家二人  
 園れ月ハおひてあさく十六夜  
 丸く物さくさくさくハ秋の月  
 人の中や身くさるれ森に秋の月  
 新筈をまよくの石の月又ふ  
 園ちくハ月夜く越さく清又深  
 日光西河の糸懸坊ハ清夜をさくく  
 いくねえく月と今宵の秋の月

芦月  
 松軒  
 月貨  
 右介  
 秋香  
 楽高  
 羽人  
 まつこ  
 春晷  
 菓月  
 惟草

殊月

名所月

胡弓水風といふき越多本枝り  
 若くふとゆへをとおへハ會歎ふふ  
 古竹をまはさくわれハ畢あり  
 棹さくハ良歌の誦くたる川向々  
 心をさくさくさくさく行旅をさく九  
 古竹ハおもは月とまきく川  
 南都鬼柳といへる妻の園を狩る  
 しく能世り御のよ断ちたるに  
 けらハ園の月とふ疑くくわ句  
 さくさくあハなれえ  
 雪ふるふ小橋ハ晴ちり雲れ月  
 多風いさくさくさくハいさくさく  
 此宵  
 卓郎

有明月  
稻

のこをうらみたふく、曉文も眼差れハ  
 今更に雪をまきふる風やこくくろくろ  
 うなる氣のかきこくくくくくくくくくく  
 ねと稻うらみ特傳を未きくくくくくくく  
 市町のきはとち晴くくくくくくくくく  
 稻たんと雨く短——言の首 古 乙二  
 稻積くく移くくの白いわけく危 謝堂  
 い稲積くく引込や糸汁中 今  
 氣ゆくくくや番小指代る稲の味 得無  
 吟くくく月表くくくくくくくくくくくく  
 くくくくく稲指込やうけは是り 粟山  
 分まきくく稲株とくくくくくくくくくくく 古 三 鷲

稻穂

うき稲

落穂

勢方のまはるやあま稲のたけ けと女  
 あくくくむや一及おきくくく稲穂 著莪  
 床の百れ打りかけく稲穂く形 大梅  
 骨折く交くまきく稲わくか 里つ石  
 踏くくくくくくくく稲穂くれ 晨支  
 かけ稲や帯を内をれわ井戸 南枝  
 うき稲乃百粒あり大鳥毛 亦草  
 旅人の垣根くくくく稲穂くれ 古 一 茶  
 ひもくくく月ふちる秋のおちわふ 万頃  
 持流く節のまきくく稲わげ 羽人  
 珠粒持くく小粒くくく稲わふ 善莪  
 ぬる翁の米れ妻をかき——

くみくみとをけるお

ハ米種わけおけおきさ

荷少

少くはくえくはくふや稲

青州

新米

新米や筵籠きハ鶏

五玉

新米乃倍つるや白

小柯

粟

手此印ふけきハ重き

演吉

芙蓉

咲おくくき花えき

粗文

枝おふ芙蓉持あふ

卓池

木犀

木犀ははくり月

曾見

初紅葉

稲小や手上方枝

抱儀

伐アノきんしとある

蓬雨

とろ花

咲くをさへてん

藪高

雀麦

雀麦やなつあ

荷了

烏瓜

葉れきハ赤ら

五玉

我木香

吹くくくあひ

蓬宇

とけの花

あり先さふあ

苔花

お隙の堂の赤き

朶山

葵の花

派あをかつき

山馬

下り込さハ和

雨蝶

松茸

松たけや山の

月窓

くら筒や松たけ

棠切

木孔子

たいくつれ

且松

功 ちや早を

五玉

初汐

初汐や嵐の

萬頃

殊彼岸

長夜

夜寒

門番の鶴尻洗ふひんうり  
 かる一坊へ柿賣此出る彼岸  
 けりそ山持の愛捨ふひんうり  
 多小ちる鐘をすたなう萩長く  
 世ハかくとらみーりけきハ萩長  
 森うへまこ臨へ零ある萩長く  
 桐の葉の青いーる萩長く  
 病人と清木と森くお零  
 萩長くうちうちや氣お出りお  
 月のさけ強きをまもる萩長く  
 往遠く燃ちんむくの萩長く  
 猫小あて例く新魚森の萩長く

月貨 萬頃 今 琴雅 宇金 宇弘 船志 犬草 巢鷺 守中 南志 宇弘

朝寒

やゝ寒 肌寒 露

釣くあゝ魚く萩むく萩長く  
 萩長くとまゝに萩ちうふ打けけ  
 萩長くや足軽町く呼ぶ足層  
 あまゝまふ持ある萩酒の余る  
 萩長くやわらち萩長くつきま  
 萩長くと萩のまきれふわうれ  
 やまゝ乃たて藻光うむき  
 萩長くや波く流うやまの萩  
 光ののさけ萩あり萩長く  
 萩長くと萩の火程やはゆの萩  
 出送入の萩あり萩の住居  
 萩長くと萩く萩の萩の萩

芦月 抱儀 琴雅 龜六 寄泉 北枝 錦露 和戒 風朗 山骨 全 立之

吹ちりしあやまつて五雲の玉  
おつゆやうつふつむ餘蔭瓜  
魚をねて氷の光りにつねのり  
あつそねくえんそくきりての家の

得蓋  
五玉  
冬岐  
若窓

妙見社頭

仰見る松の老玉や露の玉  
あふり谷と露とある光りねく  
ころろおきまきくに涼しや露の物  
お露の中やぬりも一山  
網引の葉るをまつる露の門  
風はあやむおくおる茶とく少  
ああよのあやと清くおる

秋香  
素堂  
右介  
一清  
氷松  
樓堂  
成雨

添水

あちちや船あやうくわうく  
あやわこのうへよんんころあのを  
とららよんんそくそあはし袖のあ  
とくんれはとき物なや中のあ  
おんたうくあよあよのわくそ危  
あつのねそつて猫のくそまたり  
おくやあつの遠くあ鹿川  
あつのおやあつあ系へあま履古  
おつやけく添つてあつの終りたり  
あつて氣のよむむあつや産を

牛歩  
退歩  
釜吏  
双鳥  
巴山  
悠々  
陸鷹  
其角  
竹古  
嵐湖

丘く智と山つて添あくれ

史千

鳴子

鳴子むく夜や居る鹿の音  
鳴子むく小田や藤花の匂やくと  
鳴やんて白蛇をうける鳴子れ  
地つきれ家令くかける鳴子れ  
長きる窓くく曳く鳴子すハ  
曳度く世の音を打ちあふる  
霧る白蛇かきく風の音くこけ  
杜もくや水く流る鳴子れ古  
喜れあるうらふ又引く鳴子れ  
ひく夜お池あうあくちくくれ  
壁お新さくく雪く氷あふる  
手れいれ工風ゆきれあ鳴子

菓月 南枝 冬岐 船橋 正价 青州 千輪 士朗 亀六 立梧 千外 菓月

下七七

水鳴子

安山子

立たれハ鳴く人強かしくれ  
田南まくかじ持てゆく嵐く飛  
虫来あるのしふさうん烟爰れ  
松むく木小楠くくしかしくれ  
酒呑くそれく立るかしくる  
親子くく撮てあるかしくれ  
まく月おたつや流るあさかじ  
向きあつてかじあをきくねれ  
水流くく初腰くるきくし系古  
かしくく先へ白蛇入る鳴山あ  
あるあまのかじおある一柳りれ  
くくくくてけつ九葉止子の利くり

柔静 南枝 千輪 青園 四明 曙祥 山馬 万頃 益村 秀竹 芦月 巴山



落水

本此意を洩る月淋一落  
 下村を渡ひ合をやおし  
 女房小孫ゆれきやうた  
 生流る田より走るやおし  
 古橋乃一牧浮くおし  
 世話ありや棚田くのおし  
 月流るくまゝおし  
 霧一ありまゝおし  
 秋のあり迫りくおし  
 新ゆふや峰の小からの門ちれ  
 かこまらくおし  
 人くけいんえきくおし

松一  
 新溪  
 亦草  
 琴雅  
 葵可  
 南枝  
 千輅  
 曾見  
 羽人  
 一茶  
 万頃  
 真宜

小水 小雀 稲雀

雁

自れ香田より崎ふ葉はちや  
 旅中  
 丁知  
 初丁とふおきひらき  
 啼くまゝおきてやき  
 候る児乃きききき  
 夕よりれおききき  
 骨此唇一風雷くちり  
 雨雲小進をれく  
 冬新とくふと新  
 かろくおき一葉あれ  
 所れくや物小まき

大勝  
 丁知  
 月貨  
 素秋  
 助之女  
 簞庵  
 斗南  
 小柯  
 小柯  
 小柯

乙鳥帰

初ノやあたらたふる小竹  
 ささぎくや唇もこれ夕を  
 非妙の田をえ道やこれ心  
 夢けりて寝へくこれ羽香  
 明中や声さむくもさふ  
 初ノ小棹ささき月お  
 昔れへくもこりるそ鳥一ツ  
 一啼やみくくもふ秋若れ裾  
 燕のくもや沖と山りあひ  
 系れお系く並りつる免れ  
 ゆるとそ群くもさるこも系  
 初ノ市乃うへを燕のわくれふ

万頃 南枝 梅兮 史来 千輅 百畝 助宣 莖可 白益 ちから 小柯 赤草

渡鳥

初ノ風ふつこもれあふたし  
 多色く山もあつりわらう鳥  
 秋の香太きおあつりわらう鳥  
 流るる河川あつりまて秋くれ  
 夕空や香れわらう風の中  
 十羽のと情もさる山やわらう鳥  
 牧わらう小鳥も上お声聞くれ  
 あつりもふ飛もくおれをわらう鳥  
 流るるある此ふあつりこもが  
 酒白川のわらう杖をよまえく  
 初ノ鳥の引口まきわらう鳥  
 初ノ長き漁場の町やわらう鳥

波文 月貨 且松 凡阿 茲竟 寒松 味舎 以志 巢月 惟草 羽人

下世。

葉頂 四十雀 鳴

歌多し其歌精をやわたり鳥  
多四五羽杜を目の中ふわり鳥  
赤やその名さうし口やさうり鳥  
いーくわ葉つゝとたの羽音久  
わうかいと進ぶくけし四十雀  
群と田ふまへく二羽とるり鳴  
ちとつわりと逢の歌やおのりた  
鳴たつや流とれせくる盤乃ゆれ  
鳴あふれとつりきこ小鳴のまこり  
鳴たつやさふかきりくあゆり  
小菽うり鳴れ飛出し板鳴れ  
夕月に丸先をきり鳴れきり

大勝  
佳年  
佳昌  
馬桐  
大笑  
丁知  
史千  
素秋  
去兮  
里少女  
得志  
小柯

鷄

啄木鳥 百舌鳥

ふれこ小をりつ妙り女葉れ鳴  
うけ伝小送れくきり一鳴り後  
鐘と耳をと命とくおれ小鳴の声  
一畔ハ鳴もくつらなく響早し  
版立く丸うちりくる籠うつら  
かり春やありかたを啼一鷄  
羽の眼やうき鏡をとまぐうつら  
啼き夢と移の夢さうりまら飛  
林田ハああ方立くや啼うつら  
木つてもやさふふとま紫葡てけ  
木つてもや透るまら白れ眼さる  
塔おとつるく鳴啼とやとり於

鳳朗  
曉臺  
演古  
退歩  
月貨  
眉山  
白旗  
千外  
陸鷹  
心阿  
景文  
月貨

鮭

河鹿 崗

焼俵や火を焚つけくわら松家  
 一渡し越く日此出や焼れ夢  
 むまをれとるや焼れ軟やを  
 焼俵や尋ね暮れ又中つと  
 初鮭や孫と月とみ候乃先  
 月小ぬれとほしくと鮭ふん  
 一雨をけハ又俵かハハハ  
 月れちきねをれ高しあき築  
 風ちるやとつれ次舟は築の味  
 月ねとを曳くやハハハハハハハ

冬岐 一應 百部 千輪 曲阜 小柯 丁知 万頃 祖卿 千輪 南枝

落鮎

産鮎

九十九里濱飯屋秋晴  
 鮎をくき初うきと月ねく水  
 いととる濱の小空ふとれはち  
 とれ家も留ま斗とといわハハハ  
 産鮎ふんをれのをハハハハハ  
 子ハハハハハハハハハハハハハ  
 精の口をれハハハハハハハハハ  
 北の味や町を打銭は蒸の夢  
 月れ麻糸と物とつ小をくふら  
 濱秋にうれ来くハハハハハハハ  
 松とをのたるかうハハハハハハハ

丁知 南枝 琴雅 大鵬 芦窓 史千 琴雅 丈草 待聖館 氷狐 大之

麩笛

鳩吹

流るゆらうちの一角をうらうらと  
 灯ハ消く田舎に於てし麻の声  
 麻の竹や石崖の噴き茶の香おき  
 素人服のこかけの麻や立をうら  
 をとく麻の細子をうらひけを  
 友恋やうら笛をうら麻のまゝ  
 麻笛を子小をうらうら  
 一う笛や川をうらうら遠をうら  
 鳩吹の立く足迫を本れ百を  
 淋しき鳩吹をうらうらうら  
 うら吹や火の消く出る二人  
 鳩吹と余の鳥のまゝ本れ百を

答花 晒尺 錦露 鳳朗 双鳥 巢月 今 青州 人々 野水 錦露 巢月

碁

祝言

男らうらうらうらうらうら  
 お樵の舞招けうらうら  
 旅籠砂うらうらうら  
 比の如くうらうらうら  
 月をうらうらうら  
 赤い心うらうらうら  
 うらうらうらうら  
 あら川の筋うらうら  
 碁うらうらうら  
 森るんをうらうら  
 碁うらうらうら

小義 全 杜育 荷了 南枝 萬頃 荷少 右行 月窓 和戒

秋夜

秋寒

鷺

若良

新酒

今年米

秋の夜やたると小けすぬおのち  
 秋寒や寝少くわろ 罌あこ  
 心奪や奪ふちきれと詠のあろ  
 ぬまきつゝく居きと灯のあろ  
 故きあも曲突りぬや奪れ角  
 若たたこくへく山をきく吸をり  
 新酒や一ろと奪良の末葉くれ  
 色くゆと移るを奪をぬ新酒れ  
 今年米 林さくちふ喰人のさくぬと米  
 寒沙乃中うら 如くうと今年米  
 一粒小甲乙のれ 一おく一おを

芦窓 琴雅 小柯 史来 全 粗文 弄化 曙符 嘆長 了きろ 琴雅 大笑

新蕎麥 荅 荳

野分

と扱くととあきけいれと年うり  
 とれ多へ出く山夜れと一うさく  
 おの原をる氣れぬて 抱  
 嘆をのをさくく奪る志奪るぬ  
 与此茶と奪鍋ハを奪り志奪れ  
 体むねと眼の字計のむ奪れ  
 片頬と奪ちんうつれむ奪るぬ  
 奪わけく梅ハ古葉のえき  
 端端の奪る奪はる奪か  
 たちちと奪奪れ奪る奪る  
 旅人の笠かえゆと奪分  
 白枝う九ゆへと奪分

得 蕪 兀人 玩南 月窓 丁知 山月 和戒 李旦 大梅 抱儀 南志 言水

九月

菊月  
後の雛

家内中をよみて居る盤分式  
 柴北戸の小海をよきる盤分式  
 詮たす連体今人盤分式  
 百部  
 成雨  
 支考  
 宜来  
 右介  
 結トお獲のころこいよあつとくあつて  
 まうれれれおのやうかあふ田井の影ん  
 いとゆらふおあうれ何来をたかか  
 菊月此鶴を一身を習そ途ある  
 丁知  
 大鷲

秋  
秋霜

露時雨

暮れ秋  
秋の暮

晴きつていあう入のや秋の色  
 ちとつふハ交言くとし秋の色  
 月代ハあふきうれて山乃あひ  
 名は一の御中わらうや露時を  
 ちとつやまをれきうりあうれ  
 暮れ紫鳥のゆむや秋の  
 焚き草小ふさうり門や暮れ秋  
 人とるれ子れ教とあり秋の暮  
 心とるれハありあうり秋の暮れ  
 睡れを忘れれく居らう秋の暮れ  
 筆横く出さうり秋の暮

ゆい女  
 百桐  
 閑月庵  
 南枝  
 琴雅  
 小柯  
 五玉  
 小柯  
 樗山嶺  
 ゆい女  
 煮秋  
 斗南

人けうへと子しと知れ秋の夢  
西あり春とつとあり秋の夢  
待非る人つとあり秋の夢  
門メと住とあり春や秋の夢  
うとまきる春とまきれ秋の夢  
海あり小園、犯まきれ秋の夢  
猪ありと人ともあり秋の夢

柳 兼  
冬 岐  
砂 粒  
乙 彦  
外 山  
大 菅  
柔 山

秋まきる人

深切ふ吐しとあり秋の夢

曾 見

秋まきる人つとあり秋の夢

蒼 虬

十三夜

ふ志のふ志とあり十三夜  
ゆつとありと若さをむねとあり十三夜

大 鵬  
文 洲

后月

けり秋のふ志とあり十三夜  
志を學つとあり十三夜  
ふ志のふ志とあり十三夜  
秋まきる人つとあり十三夜  
此頃のやうとあり十三夜  
后れ月あり秋とあり十三夜  
后れ月暮る秋とあり十三夜  
秋の気は秋とあり十三夜  
うとありと若さをむねとあり十三夜  
鞍とありと若さをむねとあり十三夜  
抱きとありと若さをむねとあり十三夜  
きとありと若さをむねとあり十三夜

佳 年  
成 美  
乙 二  
松 一  
山 馬  
曙 蓓  
小 柯  
抱 瑞  
三 岳  
千 輪  
且 松

菊



青 帰  
 山 谷  
 小 柯  
 蘭 更  
 麟 芝  
 牛 步  
 詠 婦  
 冰 狐  
 万 人  
 万 弘  
 善 義  
 山 姫

紅葉

羽 人  
 蓬 而  
 和 戒  
 牛 步  
 古 大 江 丸  
 古 松 軒  
 李 且  
 山 谷  
 杜 有  
 女 柳  
 川 上

唐詩よりおれむのちあむね花か  
 言ふに毛の仕翁りし一々ね紫  
 瓦比つたね猪りなれたるお紫の  
 御幣さくお紫のちりにちるお花  
 ききおるくたの係りるお紫の形  
 すけりやお紫を係りあはれ者  
 お紫のちやあさりつと係りて  
 あくまのお紫無あはね紫の形  
 夕紫の夕一ちあさるくね紫の形  
 お紫のちるやあ夜のくちを  
 深くおく夕紫をさくお紫の形  
 るくおのちらんお紫のちみら

怡志  
 一本木  
 一應  
 枕月  
 里春女  
 古道彦  
 野坡  
 右介  
 亀六  
 桃蹠  
 助宜  
 乃山

柳紅葉  
 萼紅葉  
 草紅葉

ふくたあ紫の形つ出くえんたあ花  
 頂上と林森はさくちあ花の形  
 毎のの裾やちるくあ紫の形  
 ちるハ花の形あ紫の形  
 紫のちるく紫のちるくお紫の  
 あはるく追つてあ紫の形  
 あくちるくお紫のちるく紫の  
 ちる紫のちるく紫のちるく紫の  
 かくちるくお紫のちるく紫の  
 おのちるく紫のちるく紫の  
 おのちるく紫のちるく紫の  
 おのちるく紫のちるく紫の

春花  
 悠く  
 蓼可  
 着山  
 浄香  
 蓬宇  
 史千  
 万頃  
 詠帰  
 万久  
 米吳  
 芦月



柘榴 秋山

柘榴くろくろくをえとてはるさころ凡  
 喰うよめさるきてあや秋の山  
 山の秋おもふをさくくはわさる  
 半ゆくふ煙くさくく秋のや牙  
 不二中くはかけたらし秋の山  
 ね斗さくく美くあまたのや牙  
 草むくく多啼く伐木のおく丁くあり  
 山室の山をさくくあつとゆつとくは清方  
 くは侍くくせはくく月花清涼の礎  
 さくくいとおあつとつり  
 糸代やとくおくや牙ハ秋の山  
 秋の海波よ次来ふ同く  
 大梅 玩甫

秋鐘

未枯

中くく山近くくは秋のうま  
 たをれくくお程ふく秋のうま  
 うら枯やわくくくくあつと板  
 うら枯や夏物くくくく門の桶古  
 末くくくくくくくくくくくくくく  
 末くくくく古手市くくく校小路  
 鈴くくくくくくくくくくくくくく  
 狼の黙おくくくくくくくくくくく  
 松く月かくくくくくくくくくくく  
 名くくくくくくくくくくくくくく  
 柚をやつとくくくくくくくくくく  
 は市や室教くくくくくく月  
 亦草 大梅 味舎 青峨 抱琴女 小菴 大笑 蓬雨 万頃 麟芝 翠流女 登金

雀海中、  
入て鈴と成

狼参黙  
網代市

柚味嚼

宝市

旅中

短  
行旅

冬隣  
秋雜

夕み〜〜名しあひハきき〜〜ね  
 け旅や汝小あ〜む涙の〜あ  
 多喜れかれて秋ゆく野川〜あ  
 り旅や〜和定言るあ〜のこ  
 川喜れせ〜あ〜つふ〜秋ハゆく  
 ゆ〜秋の程たの〜や喜喜相  
 夢か〜る夢生の〜や冬隣  
 心手か〜る身〜秋や〜〜重  
 布袋者〜〜〜  
 ち〜〜〜は仙〜の味  
 小義  
 露  
 和戒  
 翁  
 三衛  
 仁宗  
 万久  
 南堂  
 旅中

太神宮法楽

妹ま〜わ〜ち外〜ち〜ぬねの夢

今

古今千五百題發句集

黒瀬曾見校輯

冬之部

十月

十月や実の紫の赤き朝の柿  
 十月はさうけものく降るむ  
 十月や杉斗あけ寺はさ  
 十月やまはれこし小柿の角  
 十月や退屋くきき色れ魁  
 十月をとり登けたりきり長板  
 十月はりのあきこしめを長

抱儀  
 月貧  
 万頃  
 禾木  
 松一  
 其志  
 大鵬  
 氷谷

神無月

初冬

十月はさうけさきさき漆子形  
 十月や梅ハ今こい咲けしき  
 何れさきさきさき百粒や非年月  
 一色さきさき桑畑や神里月  
 此月ハ仙さきさきかきつき  
 小笠や風山何やら非年月  
 初冬やはくハきりぬき  
 さつさや名付くさきさき降る  
 幼さを乃きれと引し世来りぬ  
 冬さきさきさきさきさきさき  
 さつさやたさきさきさきさき  
 初冬ハ稲の中さきさき小笠りぬ

羽人  
 右介  
 小笠  
 里女  
 桑月  
 桑畑  
 芦窓  
 禾葉  
 大笠  
 系文  
 千外  
 粗文

小春

初雪や口と子ん 妙なる本様堵 五王  
 とつ冬をとほく 一とや鶴の鳥 恒九  
 初冬や外田此 ありの鳥 抱儀  
 ぬきくこれむと とき常る小春これ 扇和  
 出いし序と へいしとこれ 小春これ 可年  
 冬や小春外 四歩ゆて此 糖二  
 爪よりかゝるおつ 傍き小春これ 茶静  
 二三日 日時斗 ときる小春これ 有雨  
 雀く 餌を番 色一とく小春これ 番籠  
 賣口のときと 商人や小春をくら 万頃  
 孫まうく 小春なるや小春これ 簞盧  
 あり底 小月此 ときるや小春これ 南枝

冬空 小六月

小春燈や葉ハ 枝ちり 小春香 小柯  
 船好の 島をく くりと 小春これ 百部  
 芦花家の ときと 冬ちり 小春これ 古道  
 本家く 小春 新なる 小春これ 百部  
 埋冬く 火の炭 ときつ 小春これ 流芝  
 寝きく 人あきし 宿乃 小春これ 退歩  
 きく 礼麻の 春とき とき 小春これ 山月  
 ありう へい 猪ふや 小春の とき 悠々  
 小里ハ 十の 十の 小春これ 佳年  
 本を 挽く くりと 葉畑の 小六月 乐高  
 風く くりと くる 葉なり 小六月 鳥義  
 けく くりと 枝 海や 冬の 穴 二柳

玄猪  
初時雨

二人お呼まきく玄猪文一々子 平雄  
 けをり秋小ちりけを初時雨 史千  
 かきくれ下紫條々々初しん丸 史未  
 旅人の猪の咄しやん川時雨 古眼  
 又るもの八田舎々多し初時雨 月貨  
 とららハとらねんじし初しん丸 錦露  
 外のとらねんじし初しん丸 ゆき女  
 取入し是のあとや初しん丸 松軒  
 心むら初子のをそや初時雨 二柳  
 初時雨と初くそなる初時雨 卓郎  
 時雨やと初の傘返りとき 寺席  
 晴るる初のしん丸乃若初しん丸 芝

時雨

柑子焼あゆみのくし時雨や 月貨  
 時雨ハとき名あらしん山家集 一葉  
 疎葉や月と志々此の海々そ家 眉山  
 むらら川と遠きしん丸此 素秋  
 切時雨のたけや摸しん丸 全  
 玄出しとねんじし時雨ハ山家集 素葉  
 る小根牛ハ初くもしん丸 寺吏川  
 初時雨ハ初くもしん丸 寺吏川  
 惣葉の汁しん丸や九志々此 一芝  
 月此あふしちん丸や時雨ハ 佛兄  
 初時雨ハ初くもしん丸 素葉  
 素葉ハ初くもしん丸 真宣



時をいふ法はいろいろありて  
乃ちこれとていふは  
志くもやむく村の風も  
山好みのよの成るる山の時  
以て来たるをいふつゝ  
あつちやのれ入るゝ  
たりあつちの時をのた  
まはハ吉本もや  
あつち出く鱈の志  
角の如獅子の時を  
動きやむ物も  
度れ義又かり

眉山  
山骨  
吏川  
旦松  
路芥  
湖外  
茲竟  
万頃  
一應  
槐月  
素元  
飯代

法草大慈園の詩

旭の夏をいふは  
ちよとあつちの  
時をいふは  
陣のまゝ  
晩鐘の志  
時をいふは  
生花のあつち  
時をいふは  
大仙の志  
灯と志  
庭の掃

蓮流  
魚如里  
氷狐  
一清  
かつら  
氷狐  
南枝  
其志  
百卦  
登峰  
亦草

人志くぬ時るや山の小芝茶 士馬  
 柿むらり二人一く時ふ時る也 楽高  
 樽たより子履のたしぬしこれか 梅兮  
 時る也一くも中を時てけり 万久  
 多れ者や小ねこのころ一これ 千輅  
 手およも出こむとねのちこれれ 鶴郎  
 あとたよもさや時るのくはさり 万久  
 時るるや戸をぬくおく机先 まつこ  
 しこれれも月もねの一本也 弘調  
 一本ね柿落るふつけるぬこつき  
 人をもうたふハ世乃考たうら  
 おのれとぬく

時雨會  
 神送  
 神迎

時るまらたよりや柿の落れり 松什  
 わりたまみとそ柿のしこれり 金呂  
 所る律院はけ美しきこの法言を  
 けり布施二百文の銭りかきうく  
 一山の僧侶いつく彩想風をうそ  
 これこの酒ふゆあまうく種とす  
 りの侍るさ

時るまや先ッ落風を替るる 千輅  
 市の中神の心これ出立也 仏兄  
 大まらに枯木替ねや神送り 万頃  
 叢の神送りゆく二度森が 夜雨丸  
 人此氣ハ四路おとのと神迎 藤芝

神留主

口切

御果越

御命講  
御得

非近い波ふれたをきり  
 家り知つく氣の出るや非の留  
 非の留を子んおろし  
 口切やとまをうし  
 口切やとまをうし  
 仏槽のうり  
 火にほるあき  
 目しぬ角かき  
 草の根も  
 あり

笠吏  
 荷少  
 修鷹  
 餘力  
 てき  
 益  
 琴雅  
 万頃  
 袒卿  
 船調  
 益

達六忌

十夜

芭蕉忌

達六忌や妙ふち  
 達六忌や妙ふち  
 羽多きんおろし  
 呼出とく年わ  
 人中一本此茶  
 箱深き  
 あらう  
 炬灯  
 牛ふ  
 翁  
 翁  
 笠の像

南枝  
 小柯  
 茶静  
 山馬  
 一清  
 全  
 青州  
 佳年  
 吏川  
 荷了  
 大之  
 曰人

落葉

芭蕉心

十月やいふ月花の初らん 像  
手序や比のおち葉も掃く足る  
落るくくあけきぬる菴り柳  
落たたくぬくも極くや如北中  
心も色の柿の落葉や花のあひ  
枝の困ふつゝ下るおち葉も  
掃倒ハ人いかけりおち葉も  
乾くわとちふちらるる落葉也  
掃返しく干れおち葉も  
眼ははやく物えぬ銀杏の落も  
掃先と轉りも一れ落も

葛山 二柳 吟霞 景文 ゆい女 南枝 万頃 冬岐 史千 青州 小柯

幾年のうきもたれ谷の落も  
多涼て風ももるも おちも  
引もぬり矢先ふもむ落も  
縮すも落もれうへを素足も  
落も替新の松風表ももも古  
風も人の音や落葉の初らん  
兄もいふもる増心のおち葉も  
吹もくくも外もつれも落も  
落葉ももやふももももも  
只一本も葉の中乃おち葉も  
それ葉のうらふ月もも落葉も  
吹ももも落葉ももも 垣根も

巢月 云余 如山 牛歩 士朗 山月 白扇 抱儀 答晏 士馬 善我 蓬雨

門まの抽葉のぬるおち紫うれ

佳年

藤澤山

第目れうへく新杏れ落とん  
猫亀くそんくかろき落とん  
ほ筋ハ楓うらをれ落とん

系文  
荷少  
其角

散木葉

山とや木れ落とん立ッ烟  
柳うへくそんく枝の木れた  
落つたくまへくあめ紫ん  
花まきくひあけそく木れん  
あうへく指の越を木れん  
とろろれハ枝またくあお葉れ

粗文  
流芝  
曙祥  
曾見  
南枝

風

己の尾れおの龍かへくちるお紫  
る風くけつく少くちるお紫  
ちるおの中く木れお紫ん  
あげくくさき枝やちるお紫  
あこれお紫をちの中うれ  
あこれへまく風うやちるお紫  
時るくちるお紫のちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫  
あこれお紫をちるお紫

全  
萬頃  
小柯  
得益  
風子  
紫峰  
樗良  
巴山  
右介  
青帰  
景文  
二柳

風北より吹く如く如く  
おとよとや清く秋さし者 賣  
こころとや不ろくもなる壁此お  
風や目小なりとありしや 強きこ  
おとよとや笠れうのりやその香  
こころしや吹 飛小やぬ月れき  
満月をおとよとやなる曇り柳  
風と岩のくもれ杉留り柳  
こころしや二里を歩けり 懐き  
おとよとや留りおまきくかきく  
こころしやひきたけんかきく大の川  
木とよしの吹をくもる庭原を

何年 雞年 松兮 乐商 一芝 芦窓 柳策 翁 采筭 了つ石 山馬 助宜

枯野

こころしに休けりかゆく押きり  
おとよとや三日月おむる木橋  
風北棚田を逢くおわてけり  
おとよしや二番やん一の風吹葉  
枯とて世の中お残る小むらり  
はれ暮の若きく乾く枯野うら  
老あふるたけの草あるかれ野うら  
層低う飛やとせ世乃風の中  
白根とてまのくれりくせ世は古  
約束のたまりておれかれ野は  
大化を中とくくく枯野うら  
後一まきくあふる枯野のまら犬

楓下 一清 悠々 海客 琴雅 系文 小柯 今 秋之坊 粗文 悠々 里少女

枯草 枯男 枯荷 枯原 枯蓬

枯と世へむくくくも草種を  
川と月くわハ里あるは世に  
世に面これ枯るてもあうり  
用本と門徒のたこれ枯世に  
あうりくく足るやと唐きこれの  
わうりやと本に家たう枯世に  
かこれるも長呆あうりうり  
いさきう枯く仕舞ぬ男を  
かこれ蓬や遠目くこれハ野乃  
まかこれるも葉乃暖やかこれ  
枯原や先突うけふ丸本と  
引とこれハ根おきかきうり  
枯蓬

奇象 万頃 巴山 曲阜 松軒 右介 荷了 大鵬 大鸞 芦窓 北松 答花

枯葛 枯柳

くれまろくねと冷外一草かつ  
枯葛や梓のあ乃まきれあさ  
おろけく枝ゆまのまかこれ柳  
師走のゆ子枯く谷へまうりく

南枝 小柯 眉山

枯芦

殊縁さかこれる小枝を柳く  
枯くさああるや柳のうりあまへ  
行く枯くつるるやまきこれ  
ましらく小あうりかき柳北  
枯くさう否やまきく柳北  
たきとまうく様小流一とま柳  
柳枯くまうりく言し海の香  
芦枯くおや出ふんまうり  
和

小蓑 巢月 萬頃 鳳朗 乐高 涼臺 巾女 宜未

枯芒

あきとけきく堤や岸枯る  
枯岸や劫毎山行く風のゆく  
かれ言へくく汝れなると  
まれあつく自とかり枯る  
まれのあつてんくし枯る  
小欠る葉の一篇山ち一枯る  
枯くさ一風のたれまぬまき  
枯くさ一葉まある芒の如  
ふとれや夕のれ飛くくれ芒  
雪とやまじの似今一や枯尾系  
尾系うれくく小然りけ一き  
まつし小一山あるや枯尾系

枯尾花

とふ軒あつてくちて枯尾系  
入まの節のまむやう尾系  
枯立く仰山くをれ尾系  
稲ふくくまらまれく枯尾花  
まれ葉山あらしをれ枯尾花  
以意く風れまらし枯尾系  
されくく焚ハ家あり枯尾花  
竹垣やまじのまら枯とくれ  
ま枯山あつてんく部ま  
まれ小むくや社家のまら  
四代中や小れ塚のまら  
ま年くく何ふちるやうまら

冬木立

冬枯

大鵬 稲洲 雞年 李旦 一瓢 史千 拈拍 空吏 一法 霍翁 士朗 佛兄  
ゆと女 万頃 一應 小柯 白扇 琴雅 巴山 答花 謝堂 糙二 系文 乐高



帰む

春の末に暮るるをば  
冬木之衰ふおんて  
鏡のあり新ら  
枯と葉のちりま  
残る葉の影や  
はらふや  
牛乳屋の手あ  
ゆむ  
うへ  
佳氣  
為風  
吟

抱琴女  
里春女  
正价  
春泉  
善哉  
千輪  
守中  
万頃  
杉長  
禾木  
女折  
小柯

枇杷花

吟  
浦  
外  
初  
た  
い  
林  
ひ  
最  
ま  
茶  
茶

てき  
南枝  
全  
樺嶺  
乐高  
万久  
未吳  
右行  
多美  
孫雪館  
水明  
棠鶴

ハツ手  
霜の葉  
茶の花

山茶花

茶花おや重たきれたる 結實性  
 茶花おや重たきれたる 結實性  
 茶のおを折るは 後へたのるえ  
 山茶おや僕れは花をともみ  
 山茶およ小にわらうをぬ宗佐也  
 山茶花や長を仕舞く寺系  
 山茶おの盛るをきき小庵りぬ  
 ひろくはるる中夜やわらわ  
 松とや対るの中は花をきこれ  
 石露花や風をきききき乃士  
 麦前やユ風志ありてをきし  
 麦前やこりハ花をききき

萬頃 芦窓 悠々 乃々 千輪 琴雅 萬頃 逢流 多笑 篋座 南枝

冬牡丹 松風時雨 石露花 麦蔕

何くある例くきく麦をけ  
 田く麦をききわへり 啼くを古  
 崔垣乃外や麦ゆくあつと也  
 麦前や一陣ありしや入も来  
 麦をきききく 柳のおまきり  
 麦前や日拂のかりき 湫の平  
 麦よりや下葉をききく石二の山  
 麦よりや外をききき風をの掃  
 麦前や風小あつぬ砂りとも  
 庭細り引流きり 草りも也  
 笑くぬく程きり ぬぬ大松引  
 一畑とやひく雲ふや大松引

味舎 乙二 小柯 全 棠月 由之 百部 弄化 琴雅 小柯 一菓 下葉

大根引 莖

一交り待るかりけり大根引 三槐  
白雪に塔のかりけり大根引 山了

と子お産がいらさきしはまきし人  
此れをふりあし七つさるをちり

鯉

大根引か山と風おふりしは正 南枝

鯉の足元をく席りかきし北 紫金

ふく端の湯氣の白けし揺き北 抱儀

鯉の中や外ハ風くく木く乃者 小柯

鯉控く遠くく人を除けけり 春泉

如く冷少く動つきんを女が 可淡

鯉汁お迹しハ細くかきしは正 欽哉

鯉汁

生海氣

かきしけり男をうてけりしは正 仁実

終くゆりし戸しは正 鯉汁 全

若り代ハ詩ゆりしは正 鯉汁 成美

あきそくおふりしは正 鯉汁 山谷

よよゆりしは正の巻し破し海氣 月貨

あきまらけを導きしは正の巻 荷少

くさしやもしくあきまの巻 吏川

氷書に巻きたけ付くは正 秋香

あきの強きくは正 素秋

氷多や着しは正 里春女

あきや池中か月は 立成

あきやきしは正 牛歩

水鳥

あきまらけを導きしは正の巻  
くさしやもしくあきまの巻  
氷書に巻きたけ付くは正  
あきの強きくは正  
氷多や着しは正  
あきや池中か月は  
あきやきしは正

千鳥

下五十五

眺ふあつてくさやの眺あつてくさや  
暖かきれりやむしちり  
一むれのうちくさやや新ちり  
むしちり他はきてるぬの子さるけ  
むしちり月北中くさやれり  
佐助くさやや夢や小敷子さ  
高敷ハこれ血筋ちり浮千鳥  
山北尾を辿りてくさや子さるけ  
立ちり流しこれや子さるけ  
月使をくさや侍ゆきくさ子さ  
黒くさるハ子さるけ新く月北中  
遠眺や月北夕ア北むし千鳥

眉山  
古 曉臺  
仙兄  
山谷  
真宣  
可談  
山骨  
山 高  
古 千代  
茲竟  
侏雪館  
南枝

風さゆふも北出りてさる川子さ  
月あつてくさや子さるけ  
面やふゆ先くさむ子さるけ  
和原や子さるけくさるけ  
二世く遠くえおる子さるけ  
すれくさる子さるけ北眺る 風さる  
おつてさる年や流さるくさるけ  
かてさる風とくさるけ  
懐くさるくさるけやあつてさる  
遠をや別ふ子さるけさるけ  
これ立くこれ夜アたり峰子さ  
守侍くさるくさるけ子さるけ

芦窓  
萬頃  
月窓  
景北  
古 景南  
冬岐  
千輪  
流芝  
雨蝶  
士馬  
苔花  
水狐

浮寐鳥

鴛鴦

あし

春水禁あし一く子多け歌くれ  
 夫をららくふら下るに浮寐鳥  
 一たふらふれ入家やうき秘しり  
 浮寐鳥の月を待きしころぬ  
 小たまたちくゆあつゆり池の鴛  
 恋ふゆきさしあそぶ又えとく  
 鴛鴦や一羽の岩のうき居れ  
 一たふらあまきくらすの二羽ある  
 かき一羽の動もくをれつらん  
 ときれぬ日月の小洲一彩むつ  
 ときもやまけあゆまうこふのう  
 あしむつやあしむつまきあめり

春水 謝堂 南枝 鳥義 月貨 ゆい女 楽高 巢月 来算 鳳朗 抱儀 鳥義

鴨

七羽のさう鴨あしあは居れ  
 風くちり入り乃色や鴨乃し息  
 鴨あしや一た多居れあは居  
 鳴くく入るは延しそもち池の鴨  
 飯茶のふらやうけを鴨乃し息  
 鴨一羽きつくとあし一雪あり  
 ぬる秋を小亭とあしや池の鴨古  
 白此出や延しあるくく鴨乃息  
 静一たの寐をく流るく小がれ  
 代うつ鴨の羽青やぬと  
 ちれ板のまらつをくらや鴨の息  
 尺く居るや月れ小鴨の浮況

保中館 系文 白桂 雀翁 月貨 百和 漫く 樗堂 静く 可談 ちくら 巢月

流き本おさねくくる小鴨ふ  
 つら垣れかく鴨をくねるれ  
 海系へ籠まきくまき一むら鴨  
 月此子まきくくくまきれ鴨の  
 鴨ゆや中踏あそん門切手  
 浅瀬まきく鴨の引まき隔りれ  
 板の波あそびをまきかおれまき  
 鴨ちくやぬいこむと百姓家  
 かゆくや針をかきくしきまき  
 石忍まきく  
 何うか別くはまき比の鴨  
 わる風まきやまきまきく鴨のまき

一應  
 小柯  
 史本  
 乙二  
 臥息  
 抱儀  
 亀六  
 古眼  
 紫下  
 鷄年  
 馬桐

木 兔

鴨ねくや為一にゆに四ふ動く  
 城下やまきく城下名のか小  
 くまき小鴨の流く向の岸  
 木兔ゆく月此まき知のまき  
 まき此まきまきのまき相れ  
 みつくのまきつる月板くね  
 号乃まきまき飛くまきまき  
 魚の居まきまきまきのまき  
 製刺くまきくえ遠あまき  
 子まきまきまきまき相代まき  
 あまきまき十板まきやけまきまき  
 于大根つらた蛇小細まき

氷狐  
 青州  
 立梧  
 氷志  
 氷玉  
 大笑  
 素元  
 棠馨  
 千輅  
 山骨  
 玄子  
 且松

細代字

鼻

于大根

干菜

干菜の度裏もかけの干菜の

琴雅

納豆

納豆素もくけく吼る小犬も

女柳

納豆汁

吉連もくハ燥ひちりし納豆汁

右介

頭巾

尾持もくハおけハかきもく改巾也

松一

足袋

足袋もくハ今年もくハ手に提げて

景文

紙衣

紙衣の十もくハゆる男もくハ

景文

紙衣

二ややちもくハ洲もくハ古かもくハ

白雄

後もくハあもくハ

湖外

あもくハあもくハ

湖外

吟後もくハあもくハ

小柯

閑もくハあもくハ

退步

先肩もくハあもくハ

抱儀

もくハあもくハ

卓堂

森雨の枯もくハあもくハ

琴侍

角もくハあもくハ

史来

あもくハあもくハ

宣来

あもくハあもくハ

楽富

あもくハあもくハ

中め

あもくハあもくハ

芦月

紙袋

蒲團

炭

あつと一枚にふる 炭末り如 古 塩村  
 目の見らるる 新きふらん此 万久  
 味見つく見と見ちきふらん此 寄泉  
 つととく 夜鳥あふぬらん此 楓下  
 うつとく 波かきぬらん此 釜吏  
 炭の香けあまらるあつと見おれ 李旦  
 炭り如る 新のせししへ 均志  
 炭の香けあまらん炭の起る味 大鵬  
 炭の香けあまらん炭の起る味 演言  
 炭の香けあまらん炭の起る味 小振  
 炭の香けあまらん炭の起る味 大之  
 炭の香けあまらん炭の起る味 風子

炭俵

あつと炭の炭り如 概も炭末り如 木公  
 炭の香けあまらん炭の起る味 古 益村  
 炭の香けあまらん炭の起る味 山る  
 炭の香けあまらん炭の起る味 古 一茶  
 炭の香けあまらん炭の起る味 千輪  
 炭の香けあまらん炭の起る味 白桂  
 炭の香けあまらん炭の起る味 抱儀  
 炭の香けあまらん炭の起る味 古 立姥  
 炭の香けあまらん炭の起る味 曲阜  
 炭の香けあまらん炭の起る味 答花  
 炭の香けあまらん炭の起る味 炭泉  
 炭の香けあまらん炭の起る味 中女



炭竈  
火桶

掃きつゝ庭におろけや炭俵  
炭もやちとつて対面一入白  
赤色のくねる二世の火をけり  
お鍋つけくおひき番の火をけり  
掃き除いたる一掃くまをけり  
寂一きれ引もくくろく火桶  
つひもくく果あくくろく火桶  
画屏くあそく火をけり  
くわいたおくるのちをけり  
挨拶く掃くおろけ火桶  
伝名あひの漢さくくろく火桶  
引掃く掃くくろく火桶

狹岳 千輪 大鵬 赤翁 御外 淡吉 棠功 乃考 言阿 子外 全 吟取

火鉢

空まきくあひの火鉢のかくろく  
漏れあひの火鉢のかくろく  
ほあふくく炭火の火鉢のかくろく  
はきくくく先掃くくろく火鉢  
伝あまあひの火鉢のかくろく  
伝忍をくくく火鉢のかくろく  
掃くくく火鉢のかくろく  
あひの火鉢のかくろく  
あひの火鉢のかくろく  
大勢あひの火鉢のかくろく  
伝あひの火鉢のかくろく  
あひの火鉢のかくろく

柔静 小叢 大江丸 吟霞 善義 應門 全 系文 良雅 赤志 旦松 粗文

巨燵

心ゆくゆく自由な暮らし  
折くは山を焼く利は及きり  
新の百八を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり  
折くは山を焼く利は及きり

氷谷 抱琴女 士郎 助宣 良台 史未 小之女 曲阜 氷狐 飲哉 依帰

埋火

埋火や嵐のあつてもうけを

湖外

うつらと生やるをてしれき湯の音

牛歩

埋火やとまふ音をゆきを

棠功

初雪

入おの先初雪とさしをり勢

てまろ

山の雪入く初雪のまをり

争見

初雪やこのころあつてまはつや

抱儀

初雪やらむおのころあつて

赤高

あつて雪やあつてあつて

即息

暖はあつて入る雪の斬刀音

李席

さつらと雪と折つて枯枝を

月貸

念貝 卷弁

戸北より山を焼く利は及きり

卓郎

雪

|                                                                                                                                                                                                     |                                                          |                                                          |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| 穠むくも雪の旦乃一ひき<br>養むくも雪のかをりり雪のうへ<br>つりつひて石くたもくも雪の空<br>人くも子てあはれも雪の義<br>俊くも雪のいぢくつも雪のけ<br>戸守も雪のゆるや雪のぬめり<br>雪くも雪のむくもくも雪の光り<br>し雪の雪くも雪のゆき<br>曲もくも雪のゆき雪の系<br>魚くも雪の雪の戸口や雪の流<br>雪けも雪の交りあも雪の柳<br>船つけくも雪のれ雪の地くも雪 | 青<br>木<br>山<br>大<br>嵐<br>月<br>葉<br>氷<br>級<br>け<br>柳<br>百 | 婦<br>公<br>谷<br>笑<br>湖<br>貸<br>葉<br>狐<br>袋<br>女<br>美<br>部 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|

|                                                                                                                                                                                                         |                                                          |                                                          |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| 雪の芽山うつり雪のけき雪の雪<br>雪積くも雪風入くも雪の雪<br>山くも雪の雪をくも雪の雪<br>雪の中も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪<br>雪の雪も雪の雪をくも雪の雪 | 伏<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪<br>雪 | 女<br>柯<br>菊<br>息<br>湖<br>湖<br>湖<br>湖<br>湖<br>湖<br>湖<br>湖 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|

青婦 木公 山谷 大笑 嵐湖 月貸 葉葉 氷狐 級袋 け女 柳美 百部  
 大梅 松竹 春晁 抱儀

筆横くきれは先一竹の雪 米箕

とせしむ

雪ふらふは是いつらうき板石  
 あくくあうゆふ志やうと雪後合  
 帰了るあふあうとてと雪のつる  
 吹くやや雪山あまに雪れうへう  
 うととあふ雪若白くもなうらり  
 大原や向ふうあふ果りう雪  
 うと敷のきれくゆく溜る雪  
 未知生何知死とてふりて  
 付くこもりう踏くくあふや雪のる  
 松とらうけり出るあふや雪の池

右介  
 心阿  
 全  
 佳昌  
 嘉泉  
 魚初里  
 小橋子  
 荷少  
 助宣

|              |      |      |      |      |      |      |
|--------------|------|------|------|------|------|------|
| 雪晴           | 雪磔   | 雪佛   | 雪見   | 粉雪   | 深雪   | 月雪   |
| 雪も水もあふく牛の起りる | 雪も木公 | 雪も紫峰 | 雪も演去 | 雪も眉山 | 雪も路芥 | 雪も卓郎 |
| 雪も氷狐         | 雪も   | 雪も   | 雪も   | 雪も   | 雪も   | 雪も   |

雪も水もあふく牛の起りる  
 雪も氷狐  
 雪も木公  
 雪も紫峰  
 雪も演去  
 雪も眉山  
 雪も路芥  
 雪も卓郎  
 雪も千輅  
 雪も熊く  
 雪も立成  
 雪も牛歩

霜

下三十四

とまじく残る霜一 さまらふと秋の暮  
ちかぬりもくらくとあるや 雪の蓋  
地とありく歩けり 物も 暮の暮  
棹のよおきとまじくをハ流さる  
わくのまじくこれあつて 暮秋に  
門掃とまじくハ暮をわらう  
鶏の音もあ一 暮の暮秋に  
向きやうによつて 秋暮とて色  
初暮の暮もあつて 暮の暮  
砂をよるく一 暮の暮の暮  
暮返ハハ暮の暮の暮  
暮つてや 暮の暮の暮の暮

扇和 霍翁 山骨 里少女 静く 嶮彦 小松 栗葉 悠く 南枝 山谷

つまじく残る霜一 さまらふと秋の暮  
ちかぬりもくらくとあるや 雪の蓋  
地とありく歩けり 物も 暮の暮  
棹のよおきとまじくをハ流さる  
わくのまじくこれあつて 暮秋に  
門掃とまじくハ暮をわらう  
鶏の音もあ一 暮の暮秋に  
向きやうによつて 秋暮とて色  
初暮の暮もあつて 暮の暮  
砂をよるく一 暮の暮の暮  
暮返ハハ暮の暮の暮  
暮つてや 暮の暮の暮の暮

菓月 楽高 風子 抱儀 和戒 素瓏 芦月 扇紙 史千 和戒 抱儀 曲阜

氷

氷  
遠東や早小の川原  
清き水はくはるき  
氷の根や文の  
初氷来つくき  
根をきく波の  
ひよりら此坂の  
世の聲ありあ  
鴨の啼本うき  
波と多境の出  
生菜やまたま  
くはくは鴨の  
たよりくハ

南志  
良雅一  
李旦  
柔静  
有雨  
小柯  
路芥  
成雨  
道彦  
大之

氷柱

氷柱  
姐板と菊のかれ  
美しき氷の  
積株のさ  
初氷風  
氷と足氷  
うらや氷の  
氷をけや氷柱  
氷をわん  
動をけは  
氷とけと本  
ひくく氷柱  
歩折と

牛歩  
詠帰  
善莪  
陸鷹  
夜雨丸  
鶴郎  
南枝  
凡阿  
素秋  
湖外  
小柯  
巴山

### 夷講

唾まこの雪を根くくありけり  
たつうゆく金吾此もろ水柱也  
砥のつしも雪のまゆや夷講  
滑り戸にたきまきり夷講  
互にを講先大徳となりおるこ  
世に狩れハまこも餅屋の夷講  
夷あやふ勢と水くくし所くれ  
ふ〜ぬむ瓜の長とこ夷あや  
夷講講あうれとゆりあ  
大付鈴の軸も古くくを龜  
あ物ゆハ後のるるこしあ〜母と  
この裏をわわ〜を〜ん〜んを龜

川息 山馬 万頃 大梅 草洲 大江丸 吟霞 南枝 吟息 謝堂

### 冬龜

か〜母と迫つ〜込入戸口ハ  
いろけおく子を挿えやを龜  
このゆた大りおうけ〜を〜を  
カれとをぬ〜を〜ん〜んを龜  
象眼も采釋のや〜を〜を龜  
親のゆれ茶久〜の禁〜を〜を龜  
積あん〜と樹〜か〜を〜を龜  
空〜水〜の〜を〜を〜を龜  
入川の夕は〜を〜を〜を龜  
り〜を〜を〜を〜を〜を龜  
学鞋をとま〜を〜を〜を龜  
ゆ〜つ〜を〜を〜を〜を龜

古  
楽翁 ゆ〜女 成兩 露泉 龜六 水狐 南志 卓郎 寥松 李旦 茶静 ゆ〜女

### 寒

ふきつて板はる家——雪の鐘  
斧は柄のまきしきくまきく雪うれ  
のまきまきく小龍ゆつてまきく形  
口より此のまきつてまきく形  
ねとまきおのまきまきやまきく形  
と泥を削くまき——踏口  
今よりやる田能戸のまきまきく形  
まきまきくまきまきくまきまきく形  
まきまきくまきまきくまきまきく形  
り焼く地のまきまきくまきまきく形  
まきまきくまきまきくまきまきく形  
舞のまきまきくまきまきくまきまきく形

古  
双鳥 三葛 芦窓 了きろ 仏兄 魚都里 狐下 師息 桐雨 山骨 味舎 乐高

牙 凍 冬 全

かたつてくまき——地のまき  
雪叫や氷のまきくまきく形  
枯木越炬火の氷り焼く形  
凍る氷の味まきくまきく形  
小籠乃生くまきまきくまきまきく形  
お込入のまきまきくまきまきく形  
揚刺まきくまきくまきまきく形  
たまきまきくまきまきくまきまきく形  
月代まきくまきくまきまきく形  
柳まきくまきくまきまきく形  
あけのまきまきくまきまきく形  
まきまきくまきまきくまきまきく形

古  
千鶴 大鴨 鳳朗 宜来 二柳 万頃 羽人 京文 右介 成良 淡吉 大鴨

顔見世

一教元まきくまきまきくまきまきく形

大鴨



水仙

新之世やうそこれ火を燃るる紫  
 水仙の一きこつては老来うへ  
 水仙やとくくそと生れつき  
 口をせよの水仙沸く咲くけり  
 水仙の折葉おれ葉もなうりて  
 秘ちれ葉もえきく伐る水仙花  
 水仙の咲りやさあや管藤麻  
 水仙や町をさめぬく切き家  
 切口乃由りしあふや水仙む  
 葱一抱のそとくまうりては葉  
 山えんくはくそきこ葱の細く  
 小式部はまこと文山はひ葱知古

古

古介  
 かつ  
 千代  
 得益  
 史千  
 兀人  
 千輪  
 暖春  
 多飛  
 永高  
 万頃  
 士朗

葱

冬梅

丹精く咲のそとくまうりては葉  
 山えんくはくそきこ葱の細く  
 小式部はまこと文山はひ葱知古

琴清  
 万頃  
 六介  
 暖春  
 万頃  
 南枝  
 小柯  
 草洲  
 玄介  
 鳥糞  
 万頃  
 南枝

冬田

冬鐘

冬構

冬日和

冬山

本北本のあふ流ぬく冬田北  
 山まきのの茨咲くむつゆ田北  
 飯あのを後へ切きぬをりて  
 葉畑を産りて持やをりて  
 田北宿のあかりてふのそとく  
 山えんくはくそきこ葱の細く  
 小式部はまこと文山はひ葱知古

南枝  
 万頃  
 鳥糞  
 万頃  
 南枝

冬海  
冬月

冬の海一版さうくはなるさうり  
 海子のうらまゑもさうり冬の月  
 長くと筋塘あるやさうりつき  
 酒店の戸をゆれゆき冬の月  
 余のまゝハ見え見え冬の月  
 一重ハ怪かきもさうりゆのつき  
 築橋をあらうり筋塘や冬の月  
 松さうり杜のけあさ冬の月  
 園西へ進まゆりゆき冬の月  
 さつきさうりもさうり福文一冬の月  
 築橋の浅瀬さうりや冬の月  
 見え見えさうりゆき冬の月

葛山  
 元阿  
 東川  
 万頃  
 松一  
 南枝  
 月窓  
 南雪  
 一清  
 曙祥  
 山柯  
 崖高

冬雁

ぬく免鳥

秋

飛とまゝの秋さうりさうり暖めさうり  
 林のさうりさうりあゆみさうりさうり  
 秋さうりさうりさうりさうりさうり  
 みさうりさうり嵐はさうりさうりさうり  
 牛は尾のゆりゆりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 身は知るさうりさうりさうりさうりさうり  
 迹さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 さうりさうりさうりさうりさうりさうり  
 鷹犬乃さうりさうりさうりさうりさうり  
 本はさうりさうりさうりさうりさうりさうり

馬桐  
 恒丸  
 素行  
 曲阜  
 吏川  
 芦窓  
 南枝  
 本公  
 即息  
 白雉  
 大鵬  
 下垣

鷹

列幸繩 湯婆 雲

世に云くまゝに世を極く世を  
半角の世を極く世のあり世  
老く世を極く世を極く世  
世に極の世に極く世の世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世

片窓 小柯 米呂 大鴨 松一 芦窓 乐高 山竹 可讀 百和 素行 南枝

玉散 蠅

桐鯨

時く世の世に極く世の世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世  
世に極く世の世に極く世

竹古 玩甫 李旦 文洲 五玉 紫金 一茶 南枝 山竹 三槐 千外 曲阜

|                                                                                                                                                                                                      |                                                                |     |    |    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|-----|----|----|
| 星神樂                                                                                                                                                                                                  | 里神樂                                                            | 大師舞 | 袴着 | 鉢叩 |
| 舞の人多きまじりく見るや物鳴り<br>ふれ音とあつるるあやめり<br>空のふれ一枚ぬくや柄のやと<br>板の多く火若短し楳の音<br>やと茶とくまに焼くぬれ若<br>壁のふれふれ音とく里神樂<br>笛のふれふれ音とくやと神樂<br>名にふれふれ音とくやと神樂<br>とくま若や知らくし蔵儀の眉<br>迷ひ子をぬくくしけつ神叩<br>舞のふれふれ音とくやと神叩<br>やと氣あき世令りらや神たき | 住年<br>系文<br>浄香<br>善義<br>意秋<br>南志<br>羽人<br>柚言<br>雨蝶<br>松竹<br>麓庵 |     |    |    |

|                                                                                 |                      |     |                                                                                                          |               |
|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|
| 御火焼                                                                             | 王子酒                  | 鶯々守 | 雪車                                                                                                       | 師走            |
| 沖つき都ふふきまのり<br>おぼろくく山くむうふやもちたき<br>多火焼や月もぬくくきん若百<br>京端の笑ひふちれや玉子酒<br>とく守や啼うくふれ海まじし | 松一<br>小柯<br>惟草<br>琴雅 | 番籠  | 雪車<br>空車<br>空車引くりや小くき切通し<br>奥の百ハ短引あそいん所走が<br>野のふれ空の所走や月むら<br>垣外の所走くちり一雀うれ<br>静ちるまのし師走乃板の如<br>月小啼物さしき師走う形 | 古<br>長翠<br>五玉 |

寒入  
寒雨  
臘八  
寒

鷗とる水乃其不乳師走く形  
仙を足さけりや沙走の陽田川  
る此尾く人ふりわけり沙走く形  
うきさけりハ志しー海走の考 鶉 古  
於ふ兼く居れハ沙走の形  
子此戸や沙走の形 ぬ人のく  
そつくと梅咲くさる沙走の形  
ゆうこや月此暈を世き入  
この月や悦くき此ゆき入  
鼠メの雉子あつしき入  
臘ハやとれりく心よふ狗巨賣  
きあつしきあつしきあつしき

小柯  
松一  
退歩  
揮良  
元人  
白扇  
右介  
仁寶  
右介  
大形  
鳥菱  
巢鶴

煤拂

きあつしきやうしきあつしき  
きあつしきや月あり秋ハ志歩り  
きあつしきのきいあつしきや町の  
煤の中 洒屋のきいあつしき  
煤とくくくと年々乃うきいなり  
きあつしきや鉛のきいあつしき  
戸口くく鷗の取くや煤拂い  
善の菓をけききなりきい拂い  
煤とくくと跡くく一白あつしき  
きあつしきハこれ骨折出さく形  
呼走ナシる翁の像をわく  
きい拂くこちく向けたる仙の

楽高  
巢月  
素柳  
二柳  
了きろ  
士朗  
ゆい女  
巢月  
鷗里  
稻洲  
遅流

藥喰

ぬる木の葉ゆきこころや角四川  
 古 巢兆  
 古 右介  
 まつみ  
 渡古  
 琴雅  
 羽人  
 南枝  
 荷了  
 均益  
 大笑  
 万頃

竹葉賣

寒月

寒月やもれきもあき片山家

万頃

寒念佛

寒菊

寒月や毛ふと無るにまくの隅  
 寄泉  
 寒月やまありれそおつる者  
 一清  
 寒日やあや一女の園 西  
 松一  
 月八入く星う光ると寒念佛  
 湖外  
 片まの飯の友ちれ寒念佛  
 ち介  
 寒きくや畑へ出ぬ日を葉とる  
 湖外  
 寒きくやおおつやまら葉の志は  
 ち介  
 かん菊や漫くそよひの壘  
 南志  
 寒きくや赤きおれせん恵蔭子  
 曲阜  
 寒葉やまらけくおの花のふり  
 庭海  
 かんきくれつり羨くそよひの救世  
 餘力  
 寒きくや葉たおそよひの察の庭

佳年  
 寄泉  
 一清  
 松一  
 湖外  
 ち介  
 牛歩  
 南志  
 曲阜  
 庭海  
 餘力

寒梅

寒梅や井戸に氣のたつ雪のる  
寒梅やかんとむろき能家臺  
寒梅を手に折りきや老々肘  
梅さくやあさふれと寒の中  
寒梅の凍まけしをぬ白ひくれ  
うん梅や護戸本手たる涙のさ  
折くきり程も嘆きんをつとき  
山の戸や老の松の咲たさみ  
繁茂ふく吹草祭の掃除也  
梅種と積交りきる年本ふ  
らんか小谷春さきくく一本こ  
とらつきれあま田人むくへけり

月窓 大鴨 龜六 来賀 万久 錦露 遅流 琴雅 吟霞 ちりり

冬椿

吹草祭

年木

年葉

餅搗

餅

ひんきり此由教印ぐてんれり  
下徳乃くは香系神意ハ狂之の  
号冥一く大同元年の字剣ちり  
毫々くらぬとまく其の瑞穂香雪く  
光を一一つ見梅賀のくや流と石の  
階をゆるる

輝

配衣

節季候

年の市

あつらふはとゆくち山や後の香  
配る衣くならあうう冥少けり  
手持れく節季人けりや川の入り  
うつくしく酒小汲まけん節季人  
節季人や門をぬるのく捌  
月比出く辛く来たり年の市

全 惟草 芦窓 南枝 千輪 庭松

海子と春

年忘

人あうききく此の年の市埃  
 女 巨月 大勝 玩甫 南枝 攀一 建流 簞庵

年忘れ雪籠を口座り如  
 魚淵 逢流

題武藝坊  
 薙刀不殊幾引くけとと忘

年内  
立春

年越

國西のおくむる如く一年忘  
 一清 梅室 松一 素行 斗米 古介 全 聖女 小蓑 大鵬 山谷 南枝

春待  
 象年此とるしきとを待  
 負く来こるく梅さへく丘えが  
 田毎此旭とるむとくくえんか  
 子供等ハ録りた法のるえんか  
 一越や何ハふくくも小酒巻

固見  
 年越



年豆

嵐ホム心々事々豆と桐の豆

漢高

夏まきや鬼のふ時ちりし

ときろ

お居るりりおとく免たり年の豆

琴雅

鬼ころろ鬼やらしりり雪おつ

紫金

無名の月ふらるや溜るあ

明無

追灘  
掛乞  
年暮

手おきる伝ぬりこきおえくしき

古  
暁臺

かろきくくアハハ年おぼろ

羽人

たつとく油おたりや

立梧

おろ方おれお握おぬ事おき

下人

おろお油のきりり手おろれ

木鶴

とれおき

おろおきとつおろくゆるさと雪れ

抱儀

春隣

一ふるつとちと落りぬらり

史千

眼のまへのまをを隣の垣おと

山松

曆賣

おろく心愛人のあもや曆賣

萬久

古曆

おろくはあこむおり古おと

蟻道

行年

おろ年や霧のうへ乃桐の花

大鵬

年おかくあををる入るり

古  
成美

うらふや年のとり切らお

史未

惜年

とかおむあら別あり海と山

米吳

年宵

桐の灯く秋まむお年の宵

荷少

大晦日

町中の一軒おや大いお

素瓏

おろく子の森お美

古  
午心

除夜

冬雑

雑

冬つてふハめさるん形——大梅の  
 炭切ら、用れ是より大さやう  
 中々——と大つたもさるる  
 明子の唾まく除夜の性来り  
 休まらうとまくはあさう除夜の鐘  
 年はねやむらあふ枝の世もさう  
 あらうらうのさし除夜の雉子  
 さはらき休まらう除夜の宮  
 詩まらうとまくふゆら梅枝  
 茶詩 草洲 樺嶺 松一 守中 道彦 双鳥 梅室 波文

不盡

い葉の清神ささうとく大なるり象  
 道生白にあはれハ  
 あふあるうらなれなくや詠詠  
 不盡 仁空 大梅 梅室  
 不盡 仁空 大梅 梅室

# 金花堂藏板目錄

日本橋南通四町目

須原屋佐助

## 源氏忍草

五冊

成島公序

此書は源氏物語一巻の大意狀を抄りて其の旨を以て源氏を  
とせんふ再考を以てしたるものなりと云ふは其の旨あり源氏を  
写すに及ぶ人の心とまじりて其の味ひは其の如しなり

## 萬葉摘落系

五冊

正木千幹大人輯

此書は歌の物語の事と云ふは其の旨あり萬葉集の事あり其の旨あり  
集は其の旨あり其の旨あり其の旨あり其の旨あり其の旨あり其の旨あり  
まうけく五巻と云ふ事あり

一の巻 天孫の部

二の巻 世儀の部

三の巻 神祇秘教人倫圖 郷居不の部  
四の巻 膳食秘教の部 五の巻 身歎息書 本本の部  
と雖も不始とて歌の考終つて備つてまゝ書あり

### 千鳥之跡

中臣親満大人著

此書は詠草懐命 詠冊ありと云ふは、  
其の終り或は古事本ありて考へたる書あり

### 古今 隆

本居先生 輯  
村田並樹 人 校

此書は中居大人より、  
中々として、  
よきことあり

### 類題和歌補潮

六冊

加藤古風大人撰

この書は世に於て、  
新題和歌集の題の如く、  
初撰を以ての、  
歌の撰を考へ、  
初撰を以ての、

### 唐物語

一冊  
西行上人作  
清水濱臣大人標注

この書は、  
唐の事、  
唐の事、  
唐の事、  
唐の事、



撰集假名遣

假字便覽

一冊

大野廣城先生輯

此書對類書假字通假假字便覽之類  
其力くくりやの音假借上その假字の  
類便にいぬるまがひへのき便の類  
を安んずるはせり

古今和歌集新校正 二冊

賀茂公羽考正  
鈴屋公羽再訂

是の古今和歌集の書本あり

後撰和歌集 小二冊

古今和歌集の撰集の刊本大冊の  
便りありと云ふは小冊なり且諸  
和歌集の撰集の刊本大冊の撰集の  
利は甚し

元和帝御撰

集外歌仙

一冊

一名近代歌仙

是の四行の撰集の刊本大冊の上  
の撰集の撰集の撰集の撰集の撰集  
の撰集の撰集の撰集の撰集の撰集  
の撰集の撰集の撰集の撰集の撰集

正後假字遣

一冊

賀茂季鷹縣主輯

此書の古事記日本紀等集和名抄等と  
つらく類の御書といふはあつて引出さる候  
しむ

黒澤公翁満大人著

源氏百人一首一冊

此書は室町幕府の文書家源氏百人一首の  
百人を撰びてあつてその名を源氏百人一首  
と云ふなり安んじやうに御書を撰びて  
なまの天覧の御書と云ふれは源氏百人一首  
源氏百人一首と云ふなり

小本線色摺一冊

源氏百人一首

源氏百人一首の御書と云ふは源氏百人一首  
の御書と云ふは源氏百人一首の御書と云ふは  
源氏百人一首の御書と云ふは源氏百人一首  
の御書と云ふは源氏百人一首の御書と云ふは

芭蕉道楽句山鏡一冊

雪中庵蓑太公翁述  
門人二駱者

此書は芭蕉の道楽句山鏡と云ふは  
芭蕉の道楽句山鏡と云ふは芭蕉の道楽句山鏡  
と云ふは芭蕉の道楽句山鏡と云ふは芭蕉の道楽句山鏡

古  
今  
子  
五百題叢句集 二冊

黒瀬曾見公翁校輯

此書は古事記日本紀等集和名抄等と  
つらく類の御書といふはあつて引出さる候  
しむ

字と附く今人といふなり

俳諧年表録 一冊

咫尺齋豊山公羽著

此書の真徳芭蕉の年表と云ふものありつゝこの名表の生原は此書に終るべしと云ふことあり

俳諧人名録 二冊

東都惟草堂先生輯

此書は世の俳諧家以人名といふは多しと云ふことあり下は其名をいふと云ふことあり

俳諧發句題業 一冊

椿丘太郎翁輯

此書は和名題林抄よりあつて近代の作家二千

七千二人の年表とありむ表を首ふ圖分り  
各名家の名をいふと云ふことあり

俳諧發句朗詠集 初編 一冊

一名口調龜鑑

此書の字色家の採むもの一冊ありつゝ此書の採むもの一冊ありつゝ此書の採むもの一冊ありつゝ

俳諧合鏡 懷中 一冊

拙堂芦丸翁撰

此書のいふは此書の名をいふ人の句をいふことありつゝ此書のいふは此書の名をいふ人の句をいふことあり



休閑職書壺 二冊

茶靜大人撰  
梅令大人校

此書の休閑職書壺は昔の茶壺の類に似てて何事かの  
まじりてあるが故に職書の類とありて画圖に  
あつたが、後作をかくしては別々なるものありて  
休閑職書壺なるものありて撰びてなすべしと  
て是れを合せしめて休閑職書壺の類とありて  
書とてあるが、蓋の類もあつては別々なるものあり  
類の類とありてあるが、是れあり

今人明題集 二冊

双雀弁水壺翁輯

此書の天保の初はより廿五年の間の休閑の類あり

臨時客應接 一冊

未學先生秘授

此書の臨時客應接は昔の書に似てて何事かの  
まじりてあるが故に臨時客應接の類とありて  
あつたが、後作をかくしては別々なるものありて  
臨時客應接なるものありて撰びてなすべしと  
て是れを合せしめて臨時客應接の類とありて  
書とてあるが、蓋の類もあつては別々なるものあり  
類の類とありてあるが、是れあり

あまのこゝろもわづらひのたはれにむすむすをいふてあまの使  
利あるは世にあらざるものなるまあり

金屋樹譜 三冊

長生舎主人編

時書人の草木花の地味をそのかたひにやう接木の  
まゝにてやうやうとてあまの使にけくあまの使に  
園の各木とて園にけくそのま中をばらりともあまの使  
にけくあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく

松葉以蘭譜 一冊

あまの使にけくあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく  
あまの使にけくあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく  
あまの使にけくあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく

満人

幼稚画手本 一冊

柳烟堂主人筆

あまの書もいふゆゑにあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく  
あまの使にけくあまの使にけくあまの使にけくあまの使にけく

古今名馬図彙

繪本全剛傳

繪本勇士鑑

繪本武者拵

早引二體節用集大成

勸善忠義傳 二冊

此書は室書の流の義者と其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す

画本勲功草前集 五冊

山崎知雄大人輯  
喜多武清先生画

此書は古今の英雄豪傑の名を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す

此書は古今の英雄豪傑の名を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す

足利家武鑑 一冊

間鐘先生校

此書は足利將軍家の武鑑として其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す  
其の事の内を記す其の事の内を記す

繪車三國妖婦傳

上編 五冊  
中編 五冊  
下編 五冊

合十五冊

此書の高蘭山に生るの校布ありて世上に知らず其の  
多量の第一の種中より  
其のあり

抱一先生画譜 一冊

彩色入善本

彫物画系

名家画譜 二冊

魚獵手引種

繪本百物語

梅室家集 二冊

梅室先生自撰の集あり

梅室大人改自撰家系 二冊

勢南菊所 編輯あり

糸菜茶御膳家系 五冊

双雀庵木葉公翁の家集也

日光山誌 五冊

植田孟縉編

更科日記 二冊

武家用文章 一冊

武家者武家者武家者の文章の用向切御儀なりしを以て  
河合頼朝公御書結状書白物に御書代書ありし御書  
を以て巨細の事御書代書に御書代書の御書代書  
ありし御書代書の御書代書の御書代書の御書代書

截縫早草 一冊 女中必用

この書は女中御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書

截縫の御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書

蘭養生法秘傳抄 一冊

時より心身の養生を以て御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書

古今名物類聚 全十八冊 不昧公著

古今名物類聚の御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書  
を以て御書代書の御書代書の御書代書の御書代書

廣益諸家人名録

一冊

詩佛 五山 兩先生序

此書の撰者の傳記の書画家國典の撰者  
歿後其家傳記の書画家國典の撰者  
の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。  
其の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。  
其の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。

富士根元記 一冊

鈴木頂行先生校

此の書は鈴木頂行先生の撰者なり。其の撰者なり。  
其の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。  
其の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。  
其の撰者なり。其の撰者なり。其の撰者なり。

甲冑圖式 一冊

同

著

此書は武林法量二編ニシテ甲冑ノ圖ヲシラカニス

弓箭圖式 一冊

同

著

此書は先生著ハス処ノ武林法量中弓箭ノ一節  
ナリ武家方カナク見玉フヘキ書ナリ

單騎要略 五冊

村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實禪觀衣等自ヤウ頭盔ノ  
緒ノシメヤウ背旗ノサニヤウ等マデオクク圖ヲ設ケテ詳

一サトシ手ニ携ルル処ノ鎗刀器械ニ至ルマテ其故實ヲ明カニ  
シ一騎前ノ要領ヲ盡セリ武家方ハサナリ有職ノ學子シ  
玉フ人ハ必坐右ニ置ベキノ書ナリ村井先生ハ神武迪精武  
學先入等ノ作者ニシテ其名高シ

掌中古刀銘鑿一冊 巨櫛園輯

此書ハ先ニ銘盡數多ク其ト事替リ當 同前  
專兩作一傳ノ次第珍敷作人其外吉野年号打作人又  
文中心鎬廣狹帽子箇條此煮鉦取造リノ様子梵字  
并彫物ノ次第鑿定會ノ入札ノ卷ヘヨリ致シ鍛冶ノ官名作  
人位列鍛冶ノ系圖并名寄等ニ至ルマテ委シク辨シ難キハ  
圖ヲ出シ疑敷事ハ載ス奇大ノ珍書ナリ

校正  
古今 鍛冶銘早見出

尾関永富大人撰

寸珎  
上下合本二冊

此書ハ大宝中ノ天國ヲ始トシテ今ノ世ニ至ルマデ千百餘年  
ノ間鍛冶ノ銘ヲ輯録シ殆一万三百六十餘工ニイタル  
古カ七十六百八十餘 如此多銘ヲ集シハ末世ニナキ所也シカ  
新カ二千六百八十餘 ナラズ見出ニ速ナラシガタメ銘ノ頭字ヲいろは分ニナシ  
長銘二字銘ハサラナリ年号彫リシホドノモノハ其年号  
ヲ顯シ年号ナキモノハ其時代ヲ考ヘ年紀ヲ施シ又子  
兄弟子弟ヲ亂シ且梵字ハ治エノ信心ノ皈スル処ナレハ是等  
ヲ顯シ亦甲申ハ我身ヲ護ル第一ノ要具ナレハ卷末ニ妙珎  
家早乙女家等ノ家系并ニ鑑定ノ次第ヲ附録ス御武  
家方ハ云モサナリ武器商ノ家々モ片時モ坐右ヲナサ  
レザル珍宝ノ書ナリ

古刀  
新刀

目利早手引

同撰

両面摺

此書ハ又紋ノ控又ハ時價或ハ切レ物并様ノナド顯シ初学ノ便リニ上ナキ珍書ナリ

古刀  
新刀

相撲取組

同撰

同

古今  
刀劍

正真便覽

同撰

折本

此書ハ古刀新刀ヲ銘忠釘ハ云ニ及ズ又紋鈍ニ至ルマデ正真ノ俣ヲ写セシモノナレバ此図ヲ見覺時ハ正作ヲ見テ立所ニ夫レノ作ト知ル一而捺ノハニ逢ガトシ又刀劍ハ圓形ヨリ出ルヲ図ヲ以顯シ且疵ノ用捨或ハ目利會ノシヤウ又ハ當同前并ニ点ノシヤウヲモ附録シ亦劍尺ヲモ録シテ懐中ノ重宝トス  
實無双ノ珍書ナリ

明季遺聞

四冊

清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニシテ明末季自城ノ乱ヲ倡ヘシ本末ヨリ清ノ閩廣ヲ平定スル事ニイタル國性爺事實等ノ書ニ詳ナリ

歷代帝王承統譜

折本紀藩春川先生校閱

此書ハ唐虞以來清ノ道光帝ニ至ルマデス漢土歷代承統ノ主ヲ系譜ニ作りテ歴史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨

八冊

清朱迦陵先生摹辨

漢土ニテ歷代ノ草法ヲ集メタル書數多アルガ中ニ此編精

皇國永根文峯先生校字



善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書ヲモ此編ニオサメ出セリ  
始ノニ二畫ヨリ二十畫ニ至ルマテ檢字アリ此ヨリテ字ヲ察ム  
ベシ第八卷ニ草法母觀ヲ附シタリ草書ヲ學ヒ玉フ君子珍  
セズンハアルベカラザル書ナリ

草書前赤壁賦 一冊 天民先生書

此書前赤壁賦詩佛先生ノ書レタルナリ筆法一家ノ風ニテ  
激ヤス勸セス手本トスベキ書ナリ

小學題辭 一冊 龍澤先生書

此書宋朱文公ノ小學題辭龍澤先生ノ書レタルナリ筆  
力怒張唐人ノ風アリ

草書千字文 一冊

屋代先生書

此書八輪池屋代先生ノ筆法ヲ見ルキ刻本ナリ

玄對先生画譜 三冊

玄對翁筆

此書ハ人物花草ノ類ヲ玄對先生ノ画習フ人ノ手本トカシ  
タルナリソノ奇絶ナルリ本書ヲ開キテ見玉フベシ

西音發微 二冊

柳圃先生遺教

此書ハ和蘭書翻譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ  
撰ビ對註ノ仕様ヲ詳ニサトシ西洋字原考ヲ附シタリ

武器袖鏡 一冊

栗原先生著

以書ハヨリ武器ヲ図式ニテラハミテ且附言ニ兵士ノ事ニ付精シキ考ヘアリ

武器袖鏡後編 一冊

同 著

以書ハカブトハツクリト馬具旗指物等ニ至リスベテ武器ノ圖式ナリ

武器袖鏡三編 一冊

同 著

以書ハ現在スル古甲冑五十二種ノ威色ヲ彩色圖ニテラシメ甲冑製作便ナラシム

皇和魚譜 二卷

栗本先生纂

以書ハ河魚類凡五十一種ノ図説ヲアゲ卷二ハ河海邊在ノ魚類二十三種ノ圖説ヲアゲ卷三ハ海魚ノ類ハ近刻ニ出ス魚類ノ性味ヨリ毒ノ辨シガタク混シヤスキモノ以書ヲヨシタマハハ谷明ナルベシ

井 為己執記 一冊

羽佐間芝瓢先生著

以書ハ醫道ノ人ノ為ニスルコト心得ス己ガ為ニスルノ仁道也ト心懸ルガ肝要タルヲ辨シタル書ナリ

老婆心書 二冊

同 先生口訣

以書ハ婦人妊娠ヨリ小兒出生無病ニ成長セシムル手當

温凉調理飲食好惡宜忌等ヲ平假字ニ書ニ心得  
ヤスカラシム

張氏醫

九七冊

明張路玉著編

言志録

一冊

佐藤一齋先生著

觀世織部大夫校正

寸珍本薄用

諷本百二十番

同外 近刻

全九冊

近代名家画帖

三帖

予信流生予年壯

新画人一首

新画人一首

沈麿の具生

古今和歌集序

山岳状

ゆきこりはみり

大欽所書

生かゆり手字文

茶葉新撰百卷

吳林状

相傳状

黄之解長也

惟伊絶之象集名指

此書ハ世傳絶言象集編本の

家集撰絶之のやうなる

移不附のやうなるを扱ふ

考も如伊集吉坊ふかひ

らるはあさひ也

岸本由三條大入署

出地日記考修 全九冊

此書ハ古記絶解の象集

初に象集と絶を絶る

多るるを象集に絶り

相傳絶生園菊本居宮

村海書海其の古人の説

ありまゝのみり此絶

水の前本に絶り絶り

絶り絶り絶り絶り

絶り絶り絶り絶り



